

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十四年十一月二十五日 印刷
 昭和四十四年十二月一日発行 (毎月一日発行)
 (第五十一号)



No. 51

44年度秀句抄

十二月号



清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘西宮酒造釀

超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円



えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

賢こうて一豊の妻が出来そこね

外出着世帯疲れの目立つ妻

氣苦勞に明るく耐えて疲れたまい

黄菊白菊明治のままの色で映え

柳子氏銀婚

燻し銀二十五年のお人柄

今月のことば

私の頭の片隅に十数年来妙な問題が棲み込んでゐる。句碑とか記念碑とか慰霊碑とかいう時に「石」と「卑し」を合せた文字の碑を用いる意味、何故卑しい石だらうか。問題というのはこれだけの事である。卑と合せた文字を調べてみると碑裨痺俾等三十近くも見つかる。秦の始皇帝時代からというから中国や日本全国には類しい碑もある事だろう。路郎先生ご生前にもお尋ねしたし古文書や漢詩に堪能な方や俳人、詩人、川柳の先輩にも伺ひ続けたが未だに問題が消えない。それも最近は

多少薄らいだ気持ちだった折村、先般弓削駅頭的路郎先生の句碑建設二十周年記念が催された際私も句碑に就てお話をする機会を与えられたその光栄に有難い感謝どころで一ぱいだったが、同時にまたもや私の脳波は渦を巻き返えし始めた。或る川柳の大先輩から「自分のはずべて碑とせず塚と呼んでいる」と承りなるほどと思いはしたが、卑しい石などと受取らずに「いしぶみ」と読んておけばよいではないかと言う友人も居る。

中島生々庵

川柳塔十二月号

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

歳暮雜感……………菊沢小松園……………(2)

川柳日記……………麻生葭乃……………(29)

川傍柳初篇研究……………(七十八)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

川柳徳川記……………(十)……………富士野鞍馬……………(34)

秀句鑑賞……………清水白柳……………(32)

盲いて……………高鷺亜鈍……………(29)

中国のコトワザ考……………(大陸巻談)……………東野大八……………(30)

私論・柳論

歳暮雜感

今年もまた師走の聲に驚く、速い。本当に一年と言っても月並だが夢のようだ、しかし人間時間の経過の早い時は何等の形で役立っている時で子供、老人、病人には毎日がとても長いそうである。この意味では喜ぶべきことかも知れない。今年も風が吹き日が輝き雨が降り月が照る。宇宙の現象の前に如何に大きなことを人間が言っても微々たるものでしかあり得ない。何億万年の何億倍の大宇宙の生命の中、短かい人間の一生など光の一閃にも及ぶまい。この間絶えず人間などの想像も及ばぬ大道の力で眼に見えぬ輪回は音もなく続いている。人間が創造し人間が考え出した宗教など何の關係もない偉大なる広大無辺なエネルギーが大きな歯車を動かしているように思えてならない。人間の狭い限

44年度秀句抄

中島生々庵・北川春巢・若本多久志・川村好郎・菊沢小松園・西尾聚・

清水白柳・市場没食子・正本水客・戸田古方・橘高薫風―選。

忠臣蔵始末記……………吉田水車……………(63)

近作柳樽……………菊沢小松園選……………(36)

「梅志句集」披露の会……………東野大八……………(46)

盟友梅志と私……………葛山磐次……………(47)

初步教室……………本田恵二郎……………(50)

大萬川柳「断絶」……………清水白柳選……………(52)

川柳塔社同人総会…………………………(45)

★柳界展望……………(薫風)……………(54)

★本社十一月句会……………(庸佑)……………(56)

★各地柳壇……………(文秋)……………(60)

「パ・パ」……………水粉千翁選……………(48)

一路集「忘年会」……………松下たつみ選……………(48)

「顔色」……………山上千太郎選……………(49)

★編集後記……………(一三夫)……………(65)

界から見れば不合理や欠陥は見えてもそれは小さな避けられぬネジの弛みビスの歪みで大道は坦々として遲延なく至極合理的に動いているのでは無からうか、私も人並に人間が慥らえた仏様の前に手を合せ人が作った神様の前に頭を垂れて拝んではいるが心から無条件で信頼する気にはなれない。しかし各人の趣好に依って信頼しておらる姿を見て偉いなあと、思ひこそすれ決して貶したり腐したりする気はない。それで心の安定を得られる人は幸せだと思ふ。今年も早や終り新しい年を迎える。微々たる一年であっても変化もあり楽しみもあって結構私なりに意義ある年であった。色々な人達に会い色々な人々の話も聞いて私なりの努力もした。無駄のない一年であったことを感謝して、来年を迎える心構えにしたいと念願している
美しき幕切れ

風に木の葉の二三枚

(菊沢小松園)



中島生々庵選

京都府 大鶴喜由

老いしれて殊更予後を聞きたがり
美しいあやまちもある十五六
贈られた花熱愛と辞書にあり
ゲバの顔母に見せじと包みこみ
月賦して人並にする新世帯

大阪市 中川滋雀

大阪府京都府 (一句)

からたちに囲まれひと過去に佇ち
待たされて煙草の喫わぬ家と知り
持ち慣れた湯呑みを今日は風邪薬
人生暮色枯葉が後や先になり
縁あってここまで漕いだ浮き沈み

米子市 八木千代

旅の子へ母はお神酒で気を休め
爪先で歩いても縮まらぬ距離
音立てて才女の自信崩れる日
さりげなく客を送って採め直し
花いっぱい施設を包むように咲き

弘前市 工藤甲吉

ワッショイワッショイワッショイと行く脛かじり
ふるさとのなまり恐れるなれのはて
民泊に母の古漬け喜ばれ
番台へ恩をきせてる一円貨
カスガイもカスガイ双生児が産まれ

姫路市 村上春巳

友情の輪に囲まれて都落ち
転勤の僕に太陽が温かい

この雨に濡れてるだろう鹿想う
大いちょう正倉院を秋にする
白毫寺ここには奈良がまだ残り

大阪市

正本水客

夫婦きり茶がゆの湯気も秋になる
思った通りの返事へ笑えてき
吊皮へみな抵抗のない顔でいる
葬式で会うても話題かわらない
手の届くぜいたく妻と笑うておく

堺市

吉田圭井堂

相づちは打つが踊ってはいくれず
うとまれてそれから貯金出来始め
世の中はひまがあるからもつれ出し
まぼろしの家は建ったがこの年賦
鷹の子の筈が子鳥にも劣り

倉敷市

本田恵二朗

この辺まで花を持たせておく腹芸
ありふれた皿に非凡な味をのせ
その裏があるのが浮世というものさ
愚痴洩れるその口紅が赤すぎる
老妻のおめかし不思議そうに眺め

大阪市

大坂形水

帰郷してなるほど若いのに逢わず
日曜だタートルネックで出掛けよう
怒られることにも馴れて外交員
遠慮なく云ってくれるも得意先
松茸の東京送りの値にあきれ

大阪市

金井文秋

学級代表小さきエリートの芽生え
ささやかな優越感で世話をやき
いびきかく人と当った部屋のくじ
他人までおじいちゃんとは失礼な
うつぶんへ無口は重い口を切り

東大阪市

久米奈良子

距離おいて見れば空しい後ろ影
虫すだく露路を誇りに世をすねる
表情の乏しい髪をもてあまし
去ることも追うこともせず見つめあい
衰ろえを瞳にもしみじみ秋の肌

高槻市

若柳潮花

だんじりの上から柿へ手がとどき
柿をむくナイフへ秋の雲うごく
より添うて風にまかせせる萩の花
けしかけた口で引き裂くのも世間

おちるだけ落ちてダイヤの艶とねる

豊中市 戸田古方

金になる旅であっさり旅に出る

お向いさんから外れてまっせと注意され

嫁きおくれ貰いそこねの契かな

新婚さんお弁当まで覗かれる

すんでのことで世話好きギョっとする

大阪市 本多柳志

ホワイトカラーきれいな囚人服に見え

通知簿の余白教育ママ慌わて

幕建てる孝行だけがまだ残り

断層の深さ明治の目で見つめ

月の石

月だけが知ってる謎を又砕き

高槻市 傍島静馬

利用価値あるから心にもないお世辞

座席つと譲りそこねた眼のやり場

じわじわと別居何彼と持って去に

生きているうちに軸など分けてやり

年甲斐を女ばなしが忘れさせ

岡山県 浜田久米雄

眼鏡またタオルの端で拭かれとり

名月へシャツ一枚を足して飲み

びっくり腰のわけをひつこく聞いておき

豆腐買いに行くにも単車ぶっ飛ばし

次々の計報へきくりきくりとし

熊本県 有働芳仙

急病でいやな隣りの世話になり

這入ろうと思えば這入れる鍵をかけ

父と飲む酒が父さんらしくする

地平線十字に切って農夫佇ち

コンパクト閉める自嘲の翳掠め

鳥取市 藤本礎山

負け惜しみ参考までと観る手相

野仏は雑草以外知らず佇ち

治りたい心が主治医こまらせる

病んでみてわが俤云える家と知り

長病みへ悪友と蠅だけが来る

大阪市 橘高薫風

曼珠沙華恋わるるよりも恋うべしと

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

一方になびけば恋慕薄とぞ

欲捨てた人の咲かせし白い菊

榛名湖

榛名富士四季の手鏡秋は藍

大阪市 後藤梅志

金婚式をまえに

初恋の日が金婚の日につづく

南天の箸おさい箸にかえ二日

バーナードショウをおもう藻介の句にふれて

菜根譚を座右にいく星霜か経ぬ

菊の葉のちらしを木綿ぶろしきに

大阪市 不二田一三夫

秋田実先生紫綬褒章受章(一句)

漫才に東大卒をやっちまい

関節のはずれたような国という

親の顔オレも知らない捨て犬よ

校正の赤は男の血の色か

一輪亭花咲師と会う

八十一翁かくしゃくとして色談義

大阪市 西出一栄

胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ

四季の変わり目にこだわって病みつづけ

帳簿面黒字々々に出てあわて

かつぎ屋へかつがされてく大安日

枚方市 宮川珠笑

星があり虫の声あり閑居する
電車よ揺れるな残業帰りが乗っている
六等になって胸張る倒れた子
転居した跡が類焼してる記事

大阪市 有信新之助

十円の硬貨がなくて乗りおくれ

一と部屋がふえた気になる珠のれん

夏の子に夕陽しぶしぶ沈みけり

一と切れをばいと入れたら朝が済み

倉敷市 野田素身郎

月見酒やっぱり仕事の愚痴がでる

馬鹿にみえてもやむなし生活かかっている

冷戦中なのに仲人頼まれる

逆を行く勇気があって立ち直り

羽曳野市 榎本吐来

中年を金に無縁でまだ肥えず

赤でよし霞が喰えるわけでなし

下を見るはかない知恵は持ち合わせ

昭和元禄腰の曲らぬ俣の老い

大阪市 室谷鉄舟

太い指器用に動く釣りの餌

二人目で器用に止めて若く居る

問い詰めてやっぱいいやな事を聞き
諦める別の心は諦めず

奈良県 草 深 醉 升

貫禄は広い机がつけてくれ

下手くそのゴルフ按摩の世話になり
うまいもののテレビ料理はこね合わせ
他人の持つ株は不思議なほど騰り

高槻市 福 田 丁 路

マイカーのお通り派手に泥を挑ね

人生はうたてや小児麻痺に泣く
観るために神社仏閣ある如し
遥かなる山を突き刺す稲光り

松江市 中 川 晃 男

相傘を女背伸びで差しかける

側近のプランどおりに動かされ
君の涙僕の涙にして愛す

半生の峠そろそろ息切れし

小松市 馬 場 魚 山

国力の差をまざまざと北の海

ゴキブリの神経賞めて打ち損じ
兵隊の頃を思つてボタン付け

職安でしみじみ年に突きあたり

竹原市 小 島 蘭 幸

耳を澄ますと秋の深さが聞こえそう

だだっぴろい部屋にひとりでいるも秋

日曜にテレビ見ているようではね

始末して始末してぜいたくしてみたく

明石市 阿 万 万 的

秘境口窄秦運寺にて

杉の幹忽然として滝の白

ふり向いた石段鐘がまだ聞こえ

京都にて

石仏の一つ一つに秋の花

小ぢんまりまとめて尼寺行き届き

高石市 谷 沢 好 祐

民宿の味浅漬けの冴えた色

ハレンチが何だと視聴率が云い

日曜だなと犬思いきり朝の餌

候補者が茶の間へなだれ込んで来る

大阪市 山 川 阿 茶

宿命の案山子は野火に送られる

こおろぎよ何うろたえてわが膝に

秋夜静かに自己反省の衿ただす

不惑すぎ阿呆らしい手術受けたがり

倉吉市 奥 谷 弘 朗

人生を諦らめに似た円満さ

パトロンの内幕までは知らぬ客
新築を溜息で見る小役人

恒例をやぶる勇氣が見当らず

大阪市 川口弘生

遠眼鏡のぞいて財布を落して来

賽銭へ音のするゼニ用意する

人間の弱さ知る日のお燈明

母親に似るとは娘等信じてず

高槻市 山田季賛

残り蚊が珍客へ遠慮せず

よく聞けば僕も四〇を越えていた

痛いところ突けば上役笑うだけ

夜稼ぐ蝶の化粧の午後三時

守口市 村田瓢太

お樽柿齒槽膿漏の齒にしみる

いわし雲還らぬ夫待つ岬

鍵ッ子へ雲だんだんとたそがれる

ブラッシで撫でつけるまで髪が減り

大阪市 酒田清子

働けど苦しかった頃を恋う

心臓がも一つ欲しい世相なり

キューピット吊った車で事故に会い

胃袋もうんざりしてる胃カメラ

和歌山市 野村太茂津
寝顔だけは嘘を云わない高軒

点滴が終り月見も終り

避雷針のような人生の役どころ

千人針あの人情よりも一度

倉敷市 水粉千翁

争うている明暗を分けるまい

あなたへの背伸びあなたを信じます

反対をしている親の負けた顔

思い出は心の隅へ夕焼ける

大阪市 天正千梢

本当の領収もう一枚くれと言う

先代の自慢へ社員かしこまり

役に立つどころか借りの多すぎて

自慢とも愚痴ともとれる老の暇

小松市 四方天弘実

トイレ建て観光バスを停める策

寄附金が面目ないよな負けっぶり

過信した胃袋酷使穴があき

血統の毛並を誇る犬を連れ

出雲市 原独仙

欲求不満金属性の声

禿げ残る髪入念に撫で上げる

本職は目下パチンコとも云えず
里帰えり秋の味覚を背負わされ

宇部市 平田実男

停年の朝寝が出来るのが淋みし

地下足袋で寡婦再婚を考えず

人形に見えた見合の時の妻

腕相撲息子に負けたのが嬉し

広島県 高橋鬼焼

作業着へつかれをのこす退社ベル

共犯の相手としらず妻の酌

一万歩明日へつづく青い空

灯を消して今日のつかれを妻とわけ

笠岡市 出原真奇

彼岸花墓へ参れと咲き乱れ

輸血までして育てた子がぐれて

飲みながら内のおばはんがと気にはなり

電話です朝寝の公休起こされる

兵庫県 遠山可住

信じられぬ世相ラムネがなつかしく

目醒しよ許せねむいねむい朝

蚊帳吊ったままでこたつへ来てしまい

四十にして惑わず安い方を購う

京都市 都倉求芽

ローカル線野火を分けわけ暮れてゆく
結局は貯める話妻の夢

朝顔の執念枯れるまでつる伸ばす

プラモデル結局父さんの趣味で買い

鳥取市 河村日満

教育をのしるばかり子の猿

本当に病は気からやなとおもひ

飲むときは呼んでもらえる顧問にて

会社への愚痴定年は触れもせず

出雲市 尼緑之助

単線もいいぞ車窓に嫁ヶ島

原色で押して若さが蒔くしぶき

妻病む(二句)

まだまだ寿命ありと信じた夜の酒

げに糟糠の妻か 病みてなお

大阪市 石倉旅風

遠い国見おろしにゆく山の道

いいところみせそのうた下手な趣味

逆説をかりて憎まれ口たたく

もう会わぬひとにもおなじさようなら

香川県 三井酔夢

入院付添い

傷心の親子はひそと早寝する

焦りから無口になった子をさすり

日だまりに盲ばかりの長話

狭き門片眼でいどむ子をおもひ

岡山県 直原七面山

恋失えど生きる外なし

妻の悪口も言えて悪友

馬鹿になれとはひとごとだから

不運をよそに庭の花咲く

大阪府 児島与呂志

自分の娘信じられんのかとほざき

また妻と娘の鬨志に巻き込まれ

猫の子のような訳にはいかんやろ

口答え刺あり娘はたちなり

門真市 福島鉄児

聞かなんだことにしておく姑の耳

突き当てておいて保証の額でもめ

拒否された理由方向違います

運ちゃんが拝まれている雨の中

下関市 桜川不水

鳳仙花一つはじけぬままに秋

谷あいの楓色づき鮎光る

年よりでないとし寄りのちゃんちゃんこ

こうなさいませと添手のこそばゆし

岡山県 田村藤波

けがれない心神さまとの対話

生甲斐を一人の孫にとは寂し

頭下げるとこへは妻をやっておき

華だった頃を語るに妻は亡し

大阪府 今西章雅

忘年会いいなと屋台の客どうし

猫好きが嫌がる猫ののみを取り

理髪師に髪型まかせ目をつむり

磁石にも吸付く極とはじく極

倉敷市 木村千容

おとぼけは堂に入りけりとぼけてる

澄み切った心へ街の灯明るすぎ

ゆく雲をじっと見上げている男

陽のあたる水へ目高の寄り合えり

兵庫県 河原みのる

うなされた夢の理由へ押しだまり

まだ仕事させる気ニンク黙認し

松茸が出ぬ詫び状のあほらしさ

山林を売って

ゴメンねエ古稀まで俱に生きた木よ

倉敷市 小幡里風

盃を伏せて話の裏表

鼻髭をつけてる方が助手だった

雑談の中で見つけた妥協点

スナックバーやおら善人の歩を乱し

ハワイ 上田 紅 溪

成金も墓石先祖のサイズにし

若い気も足から年が寄って来る

眼鏡まだいらぬ自慢の耳遠く

教会へ脱走兵が果をつくり

奈良県 西辻 竹 青

憧れの人は仇と結婚し

出迎への妻重い方の荷物持つ

人命はつばつ金に換算されはじめ

ことごとたごた主任しっかりせんかいな

下関市 国弘 半休 門

アイデアー壁の色紙が魅みがえり

スタンドの顔八百長ときめつける

ネクタイはOKした日のプレゼント

父と子とチャネルさえが右左

名古屋 吉田 水 車

待ち合わせそろそろ柳眉ただならす

花びらは枝をはなれて別々に

勇み足ピリピリと叱られる

朝顔のよろよろとして秋彼岸

八尾市 香川 酔々

赤い羽根魔除けのようにつけて行き

割勘を済ませアベック腕を組み

ハイミスにからかわれてる純情さ

定年の椅子囑託で場所を変え

平田市 久家 代仕 男

老農の気骨落穂が見すこせず

雨だれの漏る屋根裏も文化財

気短かが去った釣り場で釣れはじめ

隻脚へ心して吹け秋の風

岡山市 荻野 鮫虎 狼

豊作を確め合って穂を握り

モニターの目が欠点を追い続け

真直ぐに家に帰った鍵の音

盃へ左遷したのがつぎに来る

守口市 羽原 静 歩

傷ついておんなやっぱり虹を追う

女坂いくつ越えたらたそがれる

淡々として落ち目の坂となる

墓碑銘の思い出何をさがそうか

富田林市 浅川 八 郎

本堂の読経に和して法師嬢

退屈の買手何所かに居まへんか

釘の宿命金槌に叩かれる

コンピューターへ老の貝殻笑つて

笠岡市 木山 要次

女性の立場より

尊敬のお方も或る日野獸めき

結局は詫びる立場に追いやられ

家庭では甘えてくれる肩の巾

生き甲斐は泣いて乳房を待つてくれ

呉市 林野 甦光

野次馬に言われてホース向を交え

猫に餌を催促されている昼寝

雰囲気が好きだと下戸もついて来る

ハネムーン駅長一分おくれたり

堺市 高橋 千万子

かけ引のうまさコンビの人間味

ハイキングコースの古寺榮え行く

貧しさがまんして来た片思い

ひたむきな愛受けられぬ重いペン

岡山市 川端 柳子

一步踏み込めば溢れていた涙

炎の底に沈み青年威儀ただし

叔父病で逝く(二句)

この次は見えぬ笑顔とみて飽かず

過去を知る手がかり一つ宛消える

神戸市 仲 どんたく

夫娼婦和でした損したように云い

悔のみにあらざり道草人生も

串カツの暖簾に入れば部下の顔

パトロンがございますと云うダイヤ

伊丹市 小川 静観堂

散歩のつもりだったを注射に怒るボチ

顔は顔腰から下の線も惚れ

ミニミニがいまだに診察室の秋

春は逝き夏去り秋を鉦叩く

今治市 越智 一水

原色の街の灯嘘々と燃え

大根を引くに呼吸をととのえる

土佐犬のような古参がまだ嫁かず

噴火する恐さ知りつつ村に住み

松江市 吉岡 通児

虫食いの柿は妖しき色で熟れ

長く待った割には短い聴診器

席あけてどうぞといえは下りはじめ

夜行ふとこのへん富士の見えるとこ

桜井市 岩本 雀踊子

秋の雲けとばしてみた登山靴

愚口ばい妻をいたわる肩をもむ

和歌山市 西尾公作

世の中の不幸せおったような影

生きて行く苦闘かがとが横にへる

竹原市 山内静水

男みな獣ですよ そうかしら

古米どうあろうと稲の穂が重い

すぐメモをされてる自称健忘症

せめてものおごり宇治から茶を仕入れ

東大阪市 本多清人

休日出勤何時もと違う顔と乗り

ラッシュの楽しみと無礼な若い者

虫あわれ電車の灯りへ体当り

セールの今日はついでる腹減らず

藤井寺市 西 いわを

けしゴムで消える過去ならけしてみろ

約束へ日を決めないで訪ねます

死ぬために生れて来ると人は云う

道化者となることもあり一人住み

笠岡市 木山遠二

見たような顔を見かける墓参道

効くまいと効こうと持葉離さない

ガンでなしと医者のはっきり云うけれど

六十は若し七十で振返り

あるゆとり他人の恋人値ふみする

針供養するほど女縫いもせず

針の数読んで産着が出来上る

大都市の壁に帰農の腹を決め

八尾市 高杉鬼遊

保守党を支持する程に金ができ

土工にも向かぬ身体で背広なり

一日の生命あさがお円く咲き

時代とは言えさんまにも見すてられ

大阪市 水谷竹莊

喰べるだけあればと凡人欲がなし

酔ってもマダム計算間違えず

バンドの穴かえても楽しビール腹

梅干しもつけて自慢の京茶漬

松原市 谷垣史好

唐草の風呂敷持っていると嗤う

改札口一つ残して駅更ける

エアポケットのような日があり十二月

冷えこむ日女少しく厚化粧

東大阪市 竹中綾女

ミスミセスはつきりさせたクラス会

石段を駆けのぼる子を声で追い

おすましに松茸浮かすだけを買う
ラーメンの豚の厚さで店を変え

東大阪市

竹中肖二

空飛んで通勤する日の未来像
気がついた時は担架の上に居り
ほほ笑んでそれで心は通じ合い
宿命を知らず肉牛なお太り

大阪市

横倉富久一

宝くじ売るおばさんの夢は何
カラスから見れば人間うす汚れ
消費者王様なるほどお人好し
寝汗ふきながら未来図を描き

八尾市

古川鶴声

雫とは別な音する通り雨
里帰り無心を云わぬ娘に淋しい
箸初めへ飯一粒を持て余し

米子市

林瑞枝

回復のベッドでしきり医者を褒め
病む床にせめても旅の地図を見る
病院の寂寥プラトニックラブ終る

鳥取県

清水一保

さて茶菓子だけは期待外れ過ぎ
家毎に人それぞれに秋灯下

散る為の装い紅葉にある心

尼崎市

高津徹也

別れると決めた微笑を返しとく
時報みいみい剃刃の手を運ぶ
天と地と線で結んで雨となり

京都市

松川杜的

小安峽不地山高原

不地山高原こけしを作る赤い屋根
桁倉沼弁天様の在りし島

鳴子

木洩れ陽を頼りに芭蕉の碑文読む

岡山市

坂井三葉

離農する心を案山子の眼に射られ
大安の駅へハイミス小さくいる
パトカーも疾る弥次馬も走る

鳥取県

谷無閑

幸運が続き不安がつきまとい
年輪がどちらも無疵にしておさめ
分の悪い時は補聴器はずしとき

姫路市

隠岐不酔

金釘流それでも代書屋金をと
不渡りへソコよろしゅうと強いこと
税関も評価に困る月の石

愛媛県 村上旭童

横着の家風日々濃くなりて

自家保有その豊作を嬉しがり

松江市 小林孤呂二

もう休めやすめと秋の陽が落ちる

湖も晩秋の景鴨飛来

名月や人の歩いた顔でなし

ひたすらかな心のかよう朝の膳

岡山県 大森娛句楽

生きているからには勝負つきまとい

お役所は違反奨励米の通い帳

大阪市 宮尾あいき

怪力の親方病気を打っちゃれず

スモッグをかき分け庭に秋が来た

伝統の帰郷をそそる神楽舞い

電柱につきささった陽が昇る

大阪市 福井野迷路

朝顔の醜 夏への執着

浮世とは硝子一枚金魚の目

島根県 藤井明朗

ミニブーム一層股下三センチ

酔うた振りできないはがゆさの下戸

四段目歌舞伎でなくて内之浦

都会の孤独生活に鍵をかけ

兵庫縣 磯野与志

人格は棚あげ金にとりつかれ

夜夜夜地だんだ踏んでわめきたし

西宮市 野呂鵜汀

気ばかりの尖がり脱殻にもなれず

秋空が好きで釣糸たれるだけ

三カ日長き病棟影もなく

食べなんだら瘦ると医者と言うけれど

西宮市 若林草右

湯の街の夜の背広の味けなさ

かたつむり欲しいと電話孫の声

松江市 柳楽鶴丸

駅の階段手すりの方によるも年

八十になったら出ます敬老会

皺一つ描いて漫画の首相でき

エリートとさわがれ根性ない男

岡山県 池田古心

乳母車幸せそうな影二つ

米価据置き消費者それでよからうが

宝塚市 小島桃路

女とは強いばかりか長く生き

「あんた」とも「おい」とも呼ばず六たび秋

魚ごろ探ってみてる水ごろ
誕生日娘がくれた派手なシャツ

久留米市 永松道雄

よそゆきの顔も皴苦茶謝恩会

無理は損強い相手に巻かれとき

年毎に切れ目が目立つ顔の皴

松江市 岡崎祥月

直線を愛し直線に行詰り

口論も夫婦たのしいもののうち

頼るのは妻だけ老の日日たのし

奈良市 宮口笛生

七十も八十も働く農繁期

雨に色あり大東京の夜景

一線を越えてしもうてから女

和歌山県 垂井葵水

生きてゆく傷口夜々に深くなる

かまきりの鎌振り上げたまま掃かる

妻一語われ一語秋深き夜

岡山県 出原敬一

古古米になるとは知らず稲のでき

前妻の良いところになり気づき

真直に出勤帰りは千鳥足

倉敷市 藤井春日

青春のつまずき生涯負うて生き
出稼ぎの留守居老婆は縄をない
失保金とるだけとって嫁にゆき

大阪市 河井庸佑

優勝のゼッケンひときわ大き見え
子のことでもめているのに子がとめる
いつまでも枯れぬ造花の味気なさ

大阪市 木村水洞

持てる悩みが理解出来ない裏長屋
背広着て札所めぐりを疑われ
人生の秋を迎えて澄む心

芦屋市 丸川初甫

六十の手習いゴールへ道遠し

元大阪鉄道病院院長高折茂先生告別式

焼香へ御恩の数を繰返し

永源寺

落書もはげて山門の古さ

兵庫県 大江秋月

扇風機とり忘れた俣秋の汽車

一步でも近道通勤客通る

ささやかな抵抗妻が朝起きず

愛媛県 渡辺曉童

交差点あなたが走るから走り

古くとも古歌の通りにぬかずかん
この上に言うことはなし秋の空

堺市 新谷 笑痴

ラッシュアワー紳士の仮面剥いで行く

早ようせんと豚も嫌がる余剰米

三億がゲバ棒の陰で笑ってる

大阪市 宮地 双楽

記録なとあれば伝説生れまじ

反対の意見も述べるサクラ決め

威勢よく漁夫は夜明けの霧に消え

岡山県 横山 一声

人の腹さぐるお酒の酌をする

定退もなく職人がよく稼ぎ

花が咲き実がなり枯葉となつて散り

大阪市 島野 大吉

おっさんと呼ばれてネクタイ気にしだし

値切ったら何んぼで買うと香具師凄む

落ち鮎の子まで孕んで焼け上がる

熊本市 楠田 ひで子

観客の血が燃えているしうい芸

生命の静けさまcaleない種子

老化現象気構えだけに終りそう

鹿児島県 土岐 トク子

天門館眉こき女の旅情あり

もう一度パフを叩いて待つ回診

白バラの頬そめ見合いをつけにくる

富田林市 岩田 美代

荒廢の美とやらも鑑賞し

カサカサの心捨てよう掃く枯葉

良心が髭あるような妻に見え

鳥取県 森田 布堂

明日しれぬ命にいまを生きる幸

灸の皮剥がれラッシュを抜けて出る

調室邪魔になる児を捨てました

西宮市 島居 百酒

現金はあるがツケを利かしとき

友癌で死んでドックへ入ると決め

失恋も失業もして老い残り

岸和田市 葛城 伊三郎

一つ減り又一つ減る庭の柿

美味そうな色に実った渋い柿

秋告げる桐の一葉も見当らず

加賀市 細呂 木魯木

老人へテレビがじゃまなお茶の味

託鉢の僧へ話しかけてる農閑期

大阪市 西川 誓二

尾ひれまで付けて世間は云うてくれ
二兎追うて諺通りの羽目になり

和歌山市

土谷城石

電話ベル思わず針を襟にとめ

壁一重簞笥一本置く工夫

堺市

伏見茂美

より添うて見たが燃えない疲れ知る

一言の詫びで和解のあるものを

★

川村好郎

逆光を背にして男の道たしか

対話まだゆずる心に遠くいる

造成に踏みつぶされた月見草

よう云うてくれたと毒舌なだめとき

現金輸送飲み屋のツケに襲われた

西尾栞

一本のおまけで誘導訪問をする

時雨よし河内のはての灯を守る

なぐり書きに非ずサインなり

結局は大島にして古都の秋

倅せですともといじらしいことを云う

北川春巢

管理職でっかい認印を持ち

開店に大の字をつけパチンコ屋
帰朝談行つてよかったと思えます
スランプやいうてハワイを遊んで来
駅前陸橋善も佇ち悪も佇ち

若本多久志

老妻を説きふせ墓地を買う話

前歴を言わねば貫録みてくれず

五十年振り旧友再会

水すくう手触りに似た友に逢い

淡々と古木の風情友を羨む

俗臭紛々悟りに遠き我を悲しむ

菊沢小松園

蛸焼の蛸さえチクロの世話になり

波柿へ鳥の知恵は喋ばまず

秋ひとり青磁静かな影を持つ

黙ってて体で答えてくれました

だしがらにされた女が言い募り

清水白柳

クロズアップ野性の眸ままるし

盛りつけも器用に通夜の膳出来る

柿の葉が落ちる縁側だれも居ず

華麗なる女神のひとみうるんだ

すりへった夫婦でもよし生きてれば

川傍柳 初篇研究

(七十八)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田 甫

592 日帰りの富士は六郷そこら也

水砥

藤井||浅草奥山六郷邸前にあった富士、富士浅間神社を鎮め六月朔日はお山開きで賑わった。麦わらの蛇を売ったことは既述のところで。六郷は奥山の六郷邸と富士山の六合とにかけて、富士山は高いから頂上までは無理、日帰り登山はせいぜい六合までと、江戸人には本当の富士詣りで安直にすませ、吉原泊りの方がきいてるの意。

江戸の富士六合目から横にそれ
富士道者下向吉原泊りなり
二〇・一一

江戸の富士吉原宿へすべり落ち
二二・一〇

高須||僕は浅草千束町育ちなので、学生時分から、この浅草のお富士さまをあそび場にしてしたが、このお富士さまをカコツケに吉原遊びをしたとは、大きくなるまで知らなかった。(センダン)はフタバにしてカ

ンバしくなかったわけ)
丸・岡田||礎稿に賛。

593 夜っぴとい川の箱をくらわせる

一甫

藤井||夜っぴといは夜一晚のこと。鼠は鼠なきをして客を求める商売女。従って鼠の箱は女の空寝床。くらわせるは床の番の目にあわされた。こうこじつけて、夜一夜床の番をしたあわれな遊客だ。自信のない解で乞御教示。

川端||賛。

夜っぴとよ他出してるむごい奴

むごい奴宵にちらりと来たばかい一八・七

高須||こういう句が出てくるといたずらに時間がかかる。「鼠の箱」が娼婦の空寝床というウラツケがどうしても得られぬ。一

晩ふられた遊客が、何で「鼠の箱をくらわ

せる」のか、もっと適切に説明がほしい。

前田||「鼠の箱」は鼠の糞と思う。箱は糞の古称で、糞箱からきた語。鼠の害になや

まされ鼠とり等かけるが、どうしてもとる

ことが出来ず残されたものは糞ばかり、だ

から、その糞にあたりちらしているといっ

たところであらう。

「くらわせる」は「腕まかせ石で半銭くらわせる」(傍三)の句に出てくる、たたくの意であるが、ここではあたりちらすぐらいであらう。

岡崎||諸説納得できず、さりとて自説も出せない。

丸||「鼠の箱」は忝か新造などが飼っていた鼠の箱で、一晚それを当てがわれて肝心の女は来ないと、藤井氏のように解しているものの「くらわせる」がこれでは生きず、結局不明句。

岡田||難解句。だが「鼠の箱」は丸先生の御説のほかに考えられず。「新造の憂きが友には鼠なり」(七三)で当時コマ鼠が珍重された。新造などは二十才前の娘だけにこんなものを愛玩した。句の鼠の箱はこれである。ご存知のように、コマ鼠の箱には、鼠が遊ぶための、水車式の車が入れてある。今の車は精巧だが、当時はそれを廻すとカラカラと音がする。さて句は、名代の新造をあてがわれた吉原の振られ客であ

ろう。そばに新造はグウグウ寝ていても、これには手を出すことは厳禁。いつまでたっても、あいかたの女郎のヤツは姿を見せぬ。枕元にはコマ鼠が箱の中で音を立てる。「うるせえ鼠だ」と八つ当たりで鼠の箱をたたきつける。これが「夜つとよ」——晩中というのだから、この男朝まで完全に振られたということになる。

594 壁土をあがるなよふと鐘うり

三朝

藤井||鯉はウナギ。句は未解。壁土がどうしてもわからない。

川端||「壁土」がわからない。四月八日虫除けの歌を雪隠の壁に貼る風習があったから、逃げ出したウナギが、雪隠の方に逃げ出したのではないかと思うが自信なし。

高須||「壁土」とは、子供が(疳のせいか)それを食べる習慣がある。それでウナギ売り(古くはヤツメウナギ売りが、よく町家へやって来たから、そのことか?)が「これを食べさせれば、もうそういうものは食べなくなる」と言っている句である。(藤井ドクターがこの句を未解とはどうしたとか、栄養失調か何かで、子供にそういう現象の現われることはないのか?再調を乞う)

前田||「あがるな」を食べるの意にとると前説にとれそう。子供のムシ、妊婦のつわり等に壁土を食べることは知られてい

る。このうなぎをやつめうなぎにされたことは、この「あがるな」を前説にするのであるが、単にうなぎにとると不安である。むしろ妊婦の栄養にとりた。

丸||高須説の如く解している。疳の強い子はやせっぽちで壁土や消炭など異物を食うこともある。家人が栄養の多いうなぎでも食べさせたら疳が治るかと、うなぎを買うそのうなぎ売りが子供へのあいそのことばである。

岡田||小生も子供説。妊婦のツワリるとき食べるとは初耳。壁土を食べるのはカルシウム分の不足に対する反応だから(これは藤井ドクターの畑に侵入、失礼)、食物の嗜好の全然かわるツワリの時に食べる女性もいるかも知れぬ。もし妊婦も食べるとなると、この方も考えねばならぬ。妊婦の壁土を食べる実例をお聞きしたい。

藤井||壁土を食うのは異嗜疳で不自然な食物を切望すること、例ヒステリー、蛔虫疳妊婦等とあります。壁土や炭等を食うのは子供の場合に多く見られますから、子供でよいと思いますが、子供の時は疳の虫のせいにして虫下しをませることが多く、うなぎだから妊婦ではあるまいか。

丸||小生はやはり隠当に子供ととる。「今に来ておきな(名)」といふうなぎ売り」(宝十一梅2)という句もあるし。

岡田||賛成。「壁土をあがるなよう」とウナギ売りが云ったのだから、この語調は、

ウナギを売ったあとで、子供に対して注意した句と思います。

595 下女せなに味噌をかへなと馳走ぶり

川柳

藤井||下女がいそいと好いた男に、味噌汁のおかわりを強要している接待振り、内容もたつぷりと。せなは兄さんとか好いた男に対する田舎言葉。

高須||せなとは若い衆を呼ぶ田舎言葉だがこの句は在郷から来た村の若衆に下女が馳走ぶりに味噌汁を「おかえなさい」(もう一杯あがりなさい)と言っているところであまり口の軽くないこの「せなア」から在郷の話をもちと聞きたいのだが、久し振りの同郷者に逢った田舎者の下女のもてなしぶりを、一寸おかしがっただけの句ではなからうか。

国の色せなあの分になつて来る 一二・20
なんて句もあることはあるが……。

前田||この「せな」は田舎言葉の兄の意好いた男、若い衆ではあるまい。意は礎稿の通り。

清||この句における「せな」は下女がせなゆずを二つに割ったよう

な兄だろう。

丸||賛。

岡田||同。実の兄でいよいよ句は生きてく

44年度



足音を残そう砂のある限り

倉敷市 本田恵二朗

父の歳より長く生き父を識る

大阪市 後藤梅志

情熱の枯れた時樹水のようにになりたい

大阪市 酒田清子

鉄カブト親父は覆面せなんだぞ

大阪市 西森花村

献眼をした目だウィンクなどすまい

倉敷市 本田恵二朗

打明けてくれた十字架ともに負い

米子市 八木千代

橋渡しアフターサービスうるさすぎ

岡山市 服部十九平

大阪市 市場没食子

選考委員
中島 生々庵
北川 春巢
西尾 榮
川村 好郎
菊沢 小松園

若本 多志
市本 没食子
正本 水客
戸田 古方
橋本 薫風
清水 白柳

水虫とストレスのまま退官し

奈良県 草深醉升

やりくりがついたか又も法螺を吹き

大阪府 岩田実代

株が好きで色気に入るすぎがない

笠岡市 木山遠二

山椒をもらい筍買いに行き

香川県 岡田拳法

考えは変えずに名前だけを代え

西宮市 島居百酒

去る者を去らせば独りだけとなり

倉敷市 小幡里風

一本にしよれば義理がからみつき

香川県 三井醉夢

すずきとの対話愛憎さえ空し

大阪市 正 本 水 客
さりげなくさりげなくお茶を入れている

奈良県 麻生アート

わが坐すは弥陀の膝なり策無用

名古屋市 吉 田 水 車

もみじ葉にすれば尽きんとする命

大阪府 久 米 奈 良 子

愛の証しさぐれば揺ぐばかりなり

大阪府 不 二 田 一 三 夫

なに考えていたのかわが家通り越し

大阪市 橘 高 薫 風

彼岸会の無音無明は亀にあり

大阪府 高 杉 鬼 遊

足るを知る花びら風に逆らわず

鳥取県 清 水 一 保

何気なく降って五月雨慈雨にされ

大阪府 西 い わ を

結局は釣書のいらぬ人へ嫁き

大阪府 天 正 千 梢

背をむけて寝ても信じ合える仲

出雲市 原 独 仙

大根の宿命重石と塩に耐え

大阪市 宮 尾 あ い き

木枯よ吾子の墓標よけて吹け

大阪府 川 村 好 郎

伊予緋妻へ還るのも旅なれや

岡山県 坂 井 三 葉

神様に似たのが交りまとまらず

大阪府 正 本 水 客

榮枯盛衰なめつくし苔黙す

大阪府 久 米 奈 良 子

女の直感へ男さりげなく

岡山市 服 部 十 九 平

土壇場になって他人にまた戻り

鳥取市 河 村 日 満

争うているとは見えず蝶二つ

倉敷市 野 田 素 身 郎

黒白をつけて気まずいことになり

大阪府 福 井 野 迷 路

近付いて富士の素顔に裏切られ

笠岡市 木 山 要 次

補乳器で育ち乳房を振り向かず

倉敷市 本 田 恵 二 朗

汐風の執念松を地に這わせ

大阪府 久 米 奈 良 子

人形師時代を悟る眉も引き

今日からは秒針のない暮しせん

大阪府 正本 水客

人類の太古もやはり石を投げ

倉敷市

水粉 千翁

どないしてんねんやろと不義理の人案じ

雨垂れの落ちねばならぬとき光り

大阪府

谷 垣 史 好

無一文の頃の貴方が好きだった

はしがれいことん搾取された貌

大阪府

橘 高 薫 風

貨車去ってからの陽炎位置をかえ

耳濡らす涙生涯仰臥の身

大阪府

不二田 一三夫

ふすま半分閉めてひとりの城つくる

まだ恋の目でないことがもどかしく

大阪府

高 杉 鬼 遊

師をおもう生駒の山に雪のころ

北 川 春 果 選 出

鉄カブト親父は覆面せなんだぞ

花 村

どの党も支持せずパチンコ玉を追ひ

やくりがりついな又も法螺を吹き

妻の愚痴いっしょにすわす換気扇

鬼 焼

合理化と言うけどものにいたため

与呂志

辻々に同今なお貧しい村

清 生

三カ日晴着に似合う顔がない

古 方

くだまきに吉野まで来るほど平和

水 洞

共稼ぎババもつくれる乳があり

花 宵

去る者を去らせば独りだけとなり

百 酒

山椒をもらひ筍買いに行き

三 葉

義理で来た見送り汽車の出が遅い

実 男

儲けには遠い仕事はあり余り

明 朗

仇討ちのように連休駆け廻り

遠 二

橋渡しアフタサーピスうるさすぎ

十九平

雨だれのような小言で今日暮れる

千 梢

命から二番目着ずにまたたき

緑之助

献眼をした目だウインクなどす

惠二朗

考えは変えずに名前だけを代え

拳 法

株が好きで色気に入るすぎがない

要 次

左遷の地蝶ネクタイが目立ちすぎ

素身郎

板前に注文つけて喜ばせ

水 客

この歳になつてかたばんなおるかい

美 代

フロイトがさわぐおかしな夢ば

古 方

老犬となつて鎖が重い日々

滋 雀

打ち明けてくれた十字架と負い

鉄 舟

水虫とストレスのまま退官し

没食子

西尾 榮 選出

オルゴール繰り返すのみ恋果つる
奈良子
どないしてんねんやろと不義理の人案じ

鉄児
史好
総理登壇もつと面をあげ給え
無一文の頃の貴方が好きだった
鼠とりの中の鼠の眼がきれい

小松園
阿茶
物思ひしてかゆくなり枯葉落ち
冷凍えび煩すり寄せて凍つてる
蟹は横に這うからたわむれたくも

清子
素身郎
黒白をつけて気まずいことになり
自信ないらしく葉が又変り
活けられて麦の穂実るすべもなし

あいき
凡九郎
師をおもう生駒の山に雪のこる
女なるかや猪首にも首飾り
つくばいの水で木賊がよく育ち

初甫
葵水
貨車去つてからの陽炎位置をかえ
今日も明日もぶつつけ本番で生きてます
アート

秋月
静馬
幽霊の出たとこ団地の灯がともり
人生薄暮無性に人に会いたき日
骨壺の中に隠そうかと思ひ

芳仙
川村好郎
仕立おろし能を舞うかと思われ
情熱の枯れた時樹水のようになり
たい

水車
清子
ふすま半分閉めてひとり城つゝ
一人乗る八階までの孤独感
有名になつて酔つてはくれぬ人

旅風
葵水
稲妻に平城宮跡の広さ見る
負けてから契約証書読み直し
控え目に塗れば唇マゾめいて

春巳
法泉子
耳濡らす涙生涯仰臥の身
中尊寺霧が流れて鐘が鳴り
離別せぬ程度の喧嘩で子が育ち

旭峯
一三夫
まだ恋の目でないことがもどか
熱帯魚秋の思索か動かない
人類の太古もやはり石を投げ

水車
清子
千代
旅風
葵水
春巳
法泉子
古方
薫風
丁路
旭峯
一三夫
奈良子
鬼遊

無理云つて水ぶっかけて不動様
右左揺れても国旗大をさす
わが坐すは弥陀の膝なり策無用
しんみりと見つけるものに妻の皺

すすきとの対話愛憎さえ空し
顔洗う時に心も洗う朝
一本にしばれば義理がからみつき
だまされる笑顔も母は持ち合せ

お母さんに会つてと女一途なり
喜ぶかにらむか白髪染を買い
働けるまだ働ける独り言
半数は喜んでゐる送別会

足るを知る花びら風に逆らわす
回転の木馬となつて暮れかかり
職場結婚急に会社がせまくなり
もみじ葉にすれば尽きんとする命

泥んこの過去があるから今日が
愛の証しさぐれば揺らぐばかり
なに考もいたのかわが家通り越し
気休めとわかる言葉置いて去ぬ

善意だけ見る習慣に生かされて
シャボン玉大人が吹けば淋しそう
彼岸会の無音無明は亀にあり
水客

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

水客
野迷路
アート
千翁
酔夢
いわを
里風
柳子
史好
清夢
恵二朗
素身郎
鬼遊
静歩
竹青
水車
恵二朗
奈良子
一三夫
水客
野迷路
酔夢
薫風

ええかつこ云うなともうひとる僕
子に覗きこまれるとこに母が居る

雨垂れの落ちねばならぬとき光り
入社した金の卵の二た月日

千翁

大根の宿命重石と塩に耐え
淀川の水滔々とお元日

独仙

菊 沢 小松園 選出

好きでこうなった姿の蠅取紙
コンクリートの不覚亀裂に花咲

千翁

健康な人だと靴べら知っている
木枯よ吾子の墓標よけて吹け

三葉

未練まだ名刺に元の字が抜けず
吹き溜り落葉となりしめぐりあい

我が影を写して水は流れない
蝶の羽根閉じて開いておもねらず

水客

下積みの父をお父さんお父さん
伊予緋妻へ還るのも旅なれや

富久一

人生暮色ねばつてきた誇り
文化とは馬糞に替る排気ガス

土壇場になって他人にまた戻り
汐風の執念松を地に這わせ

惠二朗

警察もやはり金庫に鍵をかけ
洩つても知らずポンプは廻り続け

甲吉

骨壺がパパでは子供腑に落ちず
補乳器で育ち乳房を振り向かず

おもわくのそれぞれ充てり花と蝶
雑布のついでに掃除器拭いてやり

奈良子

銀行も警戒をするゴルフ焼け
結局は釣書のいらぬ人へ嫁き

好祐

かすがいにきずちちはは引き裂かれ
黒白をつけて気まずいことになり

争うているとは見えず蝶二つ
神様に似たのが交りまとまらず

布堂

誘い水ささねば水も出てくれず
背をむけて寝ても信じ合える仲

形水

鳥籠の自由になれて空を捨て
近付いて富士の素顔に裏切られ

栄枯盛衰なめつくして苔黙す
巡礼の一人拾うてバスゆれる

三葉

落日の城壁ひとそと薦からむ
忍従の身に秋の風鞭となり

梅志

庶民とはまぐろの餌になるさんま
ほしがれいとことん搾取された貌

着替えても蠅魚屋を知っており
頼れるは自分だけとは淋しすぎ

水客

人生薄暮無性に人に会いたき日
女の直感へ男さりげなく

奈良子

咲きかけた蕾にまよう花鋏
人形師時代を悟る眉も引き

雑念の中の女は脱いでいる
人生薄暮無性に人に会いたき日

春巳

因果にも亀は甲羅を着て生れ
桂仙

車降りここから悔みにゆく歩巾
隠栖はしが炎は消えやらす

子に逝つても地蔵さんへ掌を合

弘道

★五選考委員が三回にわたって中間発表し
たものを再録。

資本家の姿鶴匠の綱さばき
今日からは秒針のない暮しせん

何気なく降って五月雨慈雨にされ

一保

★スペースの都合で同人吟だけ発表。

寶石の悲哀永住権がなし
出雲市 王 紫

縫い上げて羽織って妻のものだなし
鳥取県 両川 洋々

何げなくいっしょに洗濯してあげる
守口市 樋口 一峯

ささやかに生きて針目を乱さない
倉敷市 小野 克峯

棺覆うて評価を受けるもの持たず
島根県 小砂 白汀

家庭教師の居眠りを起さない
奈良県 中内 孚彦

倅が消えそう貝殻に手をふれず
大阪市 小谷 葉子

病歴を語る女患の目は見ない
愛媛県 北川 清

ざくろ裂く指は男に見せまじき
竹原市 三宅 不朽

こんな倅でいいのか長男との対話
島根県 堀江 芳子

運のいい子で東大を去年出た
出雲市 八木 千代

闘病十年誰れかの植えた柿がなり
大阪府 坂東 若芽

師の影を踏まぬどころかつるしあげ
岡山県 浜口 志賀夫

狭い視野ながら母の目ゆきとき
米子市 八木 千代

冬眠もしたかる紙幣のくたびれて
大阪市 小谷 葉子

最後のアングルやはりあなたも裸体
姫路市 前田 芙巳代

地位と金浮気しそうで気を採ませ
米子市 林 瑞枝

歩き出した頃から隣りと比べられ
守口市 岸本 豊平次

腹の立つ妻と一緒に乗り遅れ
岡山県 山田 止水

大胆な道草をして嫁にゆき
大阪府 飯田 一治

たぐりよせてみれば結び目ないえにし
広島県 岩谷 二三枝

地価跳ねて先祖へすまぬ気をおこす
竹原市 森井 菁居

地にふれて雪あたたかさにうろたえる
竹原市 脇本 政己

風るるるると草の葉にうたう
島根県 小砂 白汀

姫路市 前田 芙巳代
夢をいれたはずの小箱合鍵がない

島根県 堀江 芳子
終い風呂溢れ洗濯したくなり

大阪市 有信 新之助
寝てもして損したような宿を発ち

大阪府 谷垣 史好
よいしょと立てばよいしょと猫も起き

米子市 八木 千代
旧道の無縁塚から冬に入る

松江市 大峠 可動
灯をつけていいよと夕日傾けり

島根県 小砂 白汀
レンコンの穴の配列他意はない

島根県 堀江 正朗
誰も見ていないと思う大あくび

竹原市 脇本 政己
劣等感わく日風呂の湯溢れさせ

岡山県 川端 晴女
鳩の巣を残して庭の手入れさせ

和歌山市 飯家 和美
子が留守になれば人形にもどつて

羽曳野市 麻野 幽玄

同じ餌ばかりを金魚あきもせず

西宮市 加納 聖司
俺の顔見上げて仔犬用を足し

竹原市 森井 菁居
鳩は鳩なりに苦勞がつきまとい

出雲市 王 紫
続篇も続々篇もある絆

島根県 小砂 白汀
工場が昔栄えていたポプラ

松江市 村松 酔歩
後進県銅像の数豊かです

大阪市 堀口 欣一
これは無形文化財のようなやとな

奈良県 桑原 千里
後釜は何日までさん付けしてくれる

島根県 堀江 正朗
寝たふりで母娘の話おもしろし

今治市 古野 伶人
披露宴牧師ひとりが酔わぬ人

大阪府 岸本 豊平次
彼岸花火の墓には赤すぎる

(小谷葉子 整理)

川柳日記

麻生 葭乃

(九月から十月へ)



イメージをこわさず月へ芒立て
鹿苑へ鹿が戻ってからの月
台風はそれたが米があまるだろ
南京玉が闇に散らばる高架の夜
三猿でゆけば卑怯と云われそう
食い意地はあの世への苞にする積り

盲いても

高 鷲 亜 鈍

盲いても負けん気元氣とはめてくれ
生まなばくがでてめくらがなんぞ
(長女宅一泊)
一夜明け父の不埒が許される
友の手をそのまま握りたい
大阪の故に無銭旅行ができるばく

年寄りが年寄の手を引くばくの大坂
旧交温まりハンディキャップ無き議論
真友の自業自得を責めもせず
よい年がよい年の手に曳かれ
ひとり住いに慣れたこの頃
手をとって教えて欲しい俄めくらに
正月がすめば梅雨から夏に秋
失明苦はばく一人だけでたくさん
失明を遺伝ですかとは愚問
乞食じゃないがあたりがとうが口から出
こんなに淋しいものか銭が無い

押しかけてしかめつ面と対いあい
友の弱気へ本買うてくれ

大阪の友へやっぱり地金が出
ええ顔をしてくれたのも一二時間
世話をかけっぱなしで帰る汽車

先輩の照れ臭そうな手に曳かれ

生命を拾い生命を捨てて闇は重なる
呼出電話へバラ鉢蹴とばし転がりたり

ばくだけのことで日帰りの友うれし
★ ありがたくもったいなし古い友だち

大阪文化祭川柳大会入選句

「おんな」 伊東 静夢選

海女老いて鏡の中に海を消す 永田六龍子

「ブーム」 金泉 万葉選

篤農に欲を教えた土地ブーム 竹村 紅蕉

「コンピュータ」 若本多久志選

無と空をどう教えようコンピュータ 山川 阿茶

「団地」 広瀬 反省選

団地の灯次々消えてゆく平和 山本 恒夫

「開通」 堀口 塊人選

開通へ節くれた手を高くあげ 山崎 隆夫

「菊」 橘高 薫風選

試歩の道味方のように菊が咲く 榎本 聡夢

「地球」 西川 芳川選

プランコたりし地球が空が 上田 佳風

〈大陸巷談〉

中国コトワザ考

東野 大 八

人間である以上、滑稽風刺、頓知軽口シャレの類は誰だって口にする。私はこの種の口説は、日本人より中国人の方が、二、三枚分舌が多いように思う。そこで柳味横溢した中国人の、下世話な諧謔ぶりをとりあげてみた。

中国人の洒落言葉は、曹幼川の「諧謔語さん」によると、どのような人物であろうと最低三百から四百のやりとりは平気だとある。中国も日本同様、シャレは大別して四種であって、共通点は言葉がつねに二様のはたきをする。また上句で設定した問題を、説明または連想によって解くと同時に、実際の会話の活用の場合、同語同音もしくは他の言葉に転用されて、はじめてシャレとしての生彩を帯びるというわけだ。これは日本のそれと寸ちがわれない。

中国の俳諧雑説（頓智小咄）は、以前本誌にも書いたことなので、今回は省略して、日

本の漫才や、落語によく登場する庶民のダジャレ、軽口に焦点をしぼることにする。もっともストリー的に、語りを前提とした方にも傑作が多い。たとえば、泰山の深い谷に、人が転り落ちたが、それは三年前の話で、今だに谷底へたどりつけず、目下相変わらず転落中というのがある。そうかと思うと、神仙の樓んでいた幽境の桃を食った十六の乙女は、二百年経っても齢をとらず、二十人近い亭主を持つたものの、いぜんとしてみずみずしくて若い。しかし、ご本人は結婚にも男にもイヤ気がさして尼になってひたすらに死ぬことを祈りつづけてまた百年——この方は、何かの小説にでもまとめれば、今どきのご婦人方への風刺にもなりそう。

さて本題に入る。中国では顔そりのことをマブタを開くと書くが、大道床屋は、その頭と書く。（中国の原語で書いてもよいが、知らない人には面白くないし、第一難字のバレ

ードで印刷屋泣かせ、よって以下省く）こういう理髪屋は、ヤカン頭（光頭と書く）は半額が相場だ。だから買物を値切るときは、ご年輩の向きはすぐハゲ頭を黙ってつき出す。まけるというイミだ。

儒教的な意味で「孝弟忠信礼義廉恥」の八字がある。これを無視した奴を忘八（ワンパア）というのだが、この忘八は最後の「恥」を忘れていることも用いる。いわく「恥知らず」というわけだ。

日本には、言葉の中にふんだんにコトワザを用いる。「アバタもエクボ」「ツルの一声」「デコでも動かぬ」「寝耳に水」といったが、中国にもこれがある。

秋のキユリ（妊婦の意。腹がふくれてタネがある）

大公望の釣り（のぞむのがかかる）

役者のヒゲ（とりはずしがきく）

両替屋の看板（お高く止っている）

イタチの夜回り（油断はならない）

ひじまの夢（手前勝手な判断）

日本のコトワザの起りは、中国の古書からきているものが多い。以上のことを調べていると、そっくりそのままのものがあつた。つぎのようながそれである。

「めくらの川渡り」「空ダルは音が高い」「良薬口に苦し」「ホゾをかむ」「怒髪冠をつく」「白髪はメイ土の使い」「サル尻わ

らい」「盛り」とき」「ザルに水」

まだいくらでもある。いわゆる四書五経易占のような中国古本からの転用のものが多いのも、学のあることが俳諧に通じ、世事に長けた人々の体験が結局はウンチクある一語を生むようで、シャレは才気であり、うがちは機智で、結局その価値は人々の共感、感銘を誘うものでなければ、後世に伝わらない。川柳の名句は口伝に残るものと言うのに似ている。

こんどは少し長いのに入る。

破れタコも上るときがある（空に上るタコも時には糸のひきようで上る）

女房には三日目からさからうな

というのは傑作である。

余談になるが、中国の恐妻家は、私にいわせれば世界一じやあなかるうか。

台湾に行ってきた友人の実話だが、ここではPTAならぬPTTというのがあるそうだ。PTTとは怕太太（パータイタイ）つまり恐妻家の略称である。

さる官庁で民情調査のため、大勢の世帯持ちをあつめて、その恐妻度を測定する試みをやった。曹操方式で、恐妻家と自認する方は右へ坐って下さい。そうでない人は左へどうぞ。ところがぞろぞろ右へ行く連中の中でたった一人だけ、左の席にがん張っているのが満座の注目を浴びた。係員が幾分尊敬の度を

加えて

「あなたはおくさんが少しもこわくはないのですね」
と念を押すくぐだんの男。

「私は家を出るとき、つねに女房が人の集るところへは決していつてはいけないといわれましたので……」
と答えたという。

台湾の官吏、サラリーマンは、たいていの人が女房の写真を名刺入れや財布の中へ入れているそうである。どうせPTTの発案による、浮気止め、出費止めだろうが、私の友人が蔣介石總統と会見した際、總統の横へ坐りかけた人へ、世話人があわてて

「このイスは空けておいて下さい」

ときつい顔でいったので、きいてみるとそれは宋美齡夫人のイスで、ご当人がいてもいなくても必ず空けておくのが蔣介石閣下の多年の習慣だとある。

余談はさておき、私がこうした中国古本をひっくり返していくと、よく合一必離、必離合一という文字が出てくる。中国の五大奇書の一つ、「三国志演義」の第一行目にこうある。

——そもそも天下の大勢、分れて久しくなれば必ず合一し、合一久しければ必ず分かれるのがつねである——

中国四十年の歴史は、いみじくも正しくこ

の通りである。中国のこの命運につけても思ひ出すのは、あの文化大革命の最中、毛沢東主席は「中国の古書の滅亡を防止せよ」と厳しく布告していることだ。殊に、「紅樓夢」ほか数書は国家の保護政策を適用している。紅樓夢とは、一人の貴公子をめぐる十二人の美女や、艷婢の物語で、富貴榮華の玉楼中のラヴロマンスである。この大河小説もやっとの思いで読了すれば、キン花一朝の白露にすぎない。

このことと合一必離のコトワザを思えば、毛沢東も、蔣介石もそのコトワザの中の、一人の人間に過ぎなくなってくる理窟で、後世の史家はなんとしてこの中国の大人二人を解釈することであろうか。

「邯鄲（かんたん）の夢枕」

というコトワザ一つでコト足りるのであるまいか。白面の一書生が、立身して太守になり宰相になり、また叛かれて牢獄へ波乱万丈、恋あり、戦争あり、謀略ありで栄枯盛衰の大河の如き生涯をおくるが、そのドラマも、安宿で一飯の粟が炊き上るまでの、ほんの束の間の昼寝の夢であったという店。カンタンの夢枕とはこのことだが、成程そういえば、百歳の生涯もいまわのきわでは、はかなき一夢にすぎないのである。

秀句鑑賞



……前月号から……

清水白柳

歩るき歩るき考える性世に埋れ

北川 春果

ややうつむき加減に猫背とも見える姿勢でゆつくりと歩るきながら考えているのは、勤務のことなのであるうか、それとも生活のことなのであるうか、とにかくあまりパツとしない姿である。レジャーのことならもっと潑刺とした歩るきぶりであればならぬのだが、ここには峠を越した人生の姿しかうつつてこない淋しさがある。

真相をえぐればメスが錆びてくる

水粉 千翁

叩けばホコリの出るのはあたりまえのこと

であり気にはしないが、深くえぐればえぐる程持ちも下げも出来なくなるのが汚職である。そして或る程度のところで、ザ・エンドとなるのが普通のような。そこには目に見えない圧力がかかっている、それがメスを錆びさせるガスであり液体なのであるうか。

ある夜ふと女は鍵を忘れたき

宮西 弥生

微妙な女性心理を教えてくれた句である。かたくかたく閉じこもり勝未婚女性にもやはり周期的な、何かを求める衝動的瞬間があるのであるうか。男性の痴漢的要素がそれを嗅ぎとったとしたら大変なことになる、御用心、御用心。

寡婦として廻り灯籠の中に坐す

垂井 葵水

グルリと見まわしてみると、そのどれもがみな何かのつながりを持つているように思えるのは夫を失っているためなのであるうか。自分を中心にして動いている目は心のすき間をネラッているように見えるのも、何かに頼ろうとしているのを見ぬかれそうで心の安まるひまもない、そんなことを感じさせているようである。

割り込んだ人と吊皮となりあい

宮川 珠笑

川柳家必読の「ユーモア辞典」
秋田実主宰・不二田一三夫編集

新年号 「漫才」 送料 六円
定価 百円

発行所 大阪市生野区勝山通六ノ七九

電話大阪(七一八) 三二二八

電車が着くと行列がくずれるのは関西の方がヒドイということである。割り込んで乗ったところで座席が空いていないのは判っているのに、と、にらみつけながら皮吊にぶら下ったら、そいつの隣りだった。どうせ坐れないんだザアマミロという気持ちと割込まれた腹立たしさとが入り混って面白くない出勤になってしまったようだ。

鏡のウソつき 着物が左まえ

不二田 一三夫

鏡にうつるのは本当の姿なのである。淨ハリの鏡にかけてとエンマさんでさえ鏡を信用しているのに、鏡のウソつき奴(め)は面白。左手を上げたら写っている姿は右手を上げていたのだ、鏡というものは反対にうつるものだということが判っているのかいなのかそれをあたり前だと思っている人間に一発くらわたのが鏡のウソつきである。

心頭滅却 枕になった広辞苑

若 林 草 右

昼寝の枕に書籍を何冊も重ねたのは昔の話である。調べることがあって広辞苑をひらげて老眼鏡をかけ直しながら繰っているのだからなかなか見つからない。そのうちに眼が疲れてきたのであろうが、心頭を滅却すれば火もまた涼しで広辞苑は手頃な厚味を持っていた。

背伸びする暮しに妻の肩をかる

岩 本 雀 踊 子

お父さん今月はこれこれいくら要るのと妻から言われてもヘソクリは持っていないオマエの方から出しておけよ、と言わざるを得ないのは善良なる男性であるところの証拠なのである。そしてその夫婦の円満な生活がうかがえてほほえましい。

神経がピリリ ドラマの席はずす

小 谷 葉 子

ここにも若い女性の必理があらわされている、箸がこけても可笑しい年頃はちよつとした刺げきにも敏感なのである。メロドラマの中の悲しさに耐えかねたのであろうか、だれにも気づかれないようにソツと席を立つ心使いがよく描き出されている。

男女とはうれし半分ずつ生れ

浜 田 久 米 雄

なんだ当り前のことではないか、と言つてしまえばそれだけのことで、いもフタもない、この句の味わいはその当り前のことの中で作者の言わんとしていることは人間の手ではどうすることも出来ない自然の摂理に驚きの目を向けていることである。そして産児制限だ何だとアクセクしている人間を批判しているのを悟らねばならないのだ。

なお残る笑顔と対話 墓洗う

川 村 好 郎

ついこの間のような気がするが梅里さんが急逝して満二年と六カ月。早いものであるがまでも目をつむればすぐ梅里さんと話が出来るのは作者だけではない。恐らく梅里さんを知っているものはみんなそうであらう。殊に作者は肉親として我々以上にいつでも話をし居られることと思う。測々として胸を打つ作品である。

百姓の嫁で混み合う教習所

今 井 松 花

耕うん機、万能トラクター、など今では農業に欠くことの出来ないものである、小型トラクターがなければたんばへも行かないのだから、運転免許は嫁入り道具の必須条件になっている。だから農家の嫁となった以上は是が非でもと教習所は既婚、未婚を問わずラッシュなのだらう。時代を描き出して見事であ

る。

妻は月僕は虫の音楽まん

堀 江 正 朗

失明の悲哀から悟りの境地にまで達するに並々ならぬ苦しみがあったことはこの作者の作品をずつと見て来たものにはよく判る。満月の夜でもあろうか、ススキとお団子を供えて一家が月見でもしているのだ、アポロのことも話題にのぼつたに違いない。そしてみんながフツと黙ったときに浮かび出た句に違いないと思う。



磨かれた伝統の味

司 子 集 柳

鶴 屋 八 幡

本 店・大 阪 市 東 区 今 橋 5・電 話 (203) 7281
東 京 店・東 京 都 千 代 田 区 麹 町 2・電 話 (261) 3996
売 店・各 百 貨 店 の れ ん 街

川柳徳川記 (十)

富士野鞍馬

綱吉

五代綱吉は、家光の三男で、四代家綱の弟である。館林二十五万石であったが、家綱に子になかったので、延宝八年（一六八〇）、三十五才で將軍職を継いだ。家康から三代にわたつての武断政治は、当代になつて文治主義に転向し、大老は酒井忠清を免職して堀田正俊であった。

西鶴、芭蕉、近松等の文豪、市川團十郎、浮世絵の菱川師宣などが出て、江戸文化を高めた。所謂元禄泰平の時代となつた。

宝永六年（一七〇九）綱吉は脳病の上に麻疹にかかつて、正月に六十四才で死んだ。

水戸光圀

光圀は水戸頼房（家康の十男）の子で「大日本史」を書き、神戸湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」を建立して有名である。川柳にも、

楠を石になさつてああとほめ

みなと川こも楠家の夢の跡

湊川御營ことばも七字也

楠は嗚呼の御意にて石に成り

嗚呼譽湊に残る御言葉

御言葉の嗚呼は濁らぬ湊川

などと詠まれている。

堀田正俊

綱吉の善政は、綱吉の意識から出たものでなく、大老堀田正俊が、綱吉の名で行つたのであつた。その堀田が、貞享元年（一六八四）殿中で、老中稲葉正休に殺され、その場で稲葉も殺された。それには綱吉が命じたという疑いがある。その後の老中は凡倉で、後に柳沢吉保がのしあがつた。

犬公方

綱吉は、正保三年（一六四六）丙戌の生れ

だから、犬を大事にするよう、護国寺の僧亮賢がすすめ、生母桂昌院もそれをすすめた。それを猛烈に反対したのは堀田大老であつたが、堀田の死後、貞享四年（一六八七）に、「生類憐みの令」が出され、犬奉行まで置いた。これには庶民も大迷惑であつた。それで「犬公方」とよばれたのである。

英一蝶

朝妻の粗相一蝶船に乗り

一蝶が落度我が身も舟に乗り

島便り哀れ名画も蝶一ツ

島千物名画の出来る指でさき

と、川柳に詠まれてあるように、画家英一蝶は、朝妻船の絵を画き、將軍綱吉の寵妾お伝の方を調したというので、元禄六年（一六九三）三宅島へ流された。後十二年目に江戸に帰り風俗画で有名であつた。このお伝の方も犬を大事にすることをすすめた一人である。

八木摩天郎著

「古川柳に詠まれた堺の人々」

送共 75円

堺市南清水町32
新谷 笑痴

浅野長矩の刃傷

元禄十四年（一七〇一）三月十一日に、京都から將軍へ、年賀返礼の勅使が下向した。

その饗応役の浅野内匠頭長矩は、指導役の吉良上野介義央が、事毎に手違いの指図をした事を憤り、三月十四日、城中松の廊下で、義央に切りつけた。

こつずにてつしてちいさ刀ぬき

(明六仁二)

大げんくわ烏帽子を着たが相手也

(榜三三)

それを抱きとめたのが梶川与惣兵衛で、ために五百石の加増になった。

五万石しつかり抱いて五百石

(五〇三)

場所柄でとりさい人も五百石

(榜初四)

殿中の刃傷は、切腹、絶家という厳しい定めであったので、長矩は即日、芝の田村右京大夫邸で切腹した。時に長矩三十五才であった。

鷹の羽を網へぶち込む不慮なこと

(五〇三)

鷹の羽は浅野の家紋で、網乗物は罪人用である。そうして浅野家は断絶した。

殿中刃傷はこれが三度目で、第一は、寛永五年(一六二八)八月十日、西の丸で、目付役豊島刑部少輔明重が、老中井上主計頭正就を切り殺して自刃したので、第二は、貞享元年(一六八四)老中稲葉石見守正休が、大老堀田正俊を殺し、その場で殺されたのである。これを江戸城三大刃傷という。

赤穂義士

元禄十五年(一七〇二)十二月、播州赤穂浅野の浪士大石良雄等四十六人が、本所の吉

良邸へ乱入して、主君長矩の仇、吉良義央を討ち取ったという事件は、後世潤色されて、浄瑠璃、芝居、浪曲、講談などで大きく伝えられている。その時これを義挙として認めるか、法で処分するかに諸説があったが、获生徂来、太宰春台の法理論で切腹ときまった。

義は重しまた大法も軽からず

御捌の入札義士の腹へ落ち

惜しい石切るも是非なき権をとき

太刀取りの感涙義士の襟へ落ち

ちつともいたくなきそうな義士の腹

などと川柳に詠まれている。翌十六年二月四日に四十六人は切腹したのである。

柳沢騒動

柳沢吉保は、綱吉の寵愛をうけ、千三十石小納戸役から、甲斐十五万石に出世した。この殊遇から色々の妄説を生じ、種々の小説が書かれた。それには吉保が綱吉から百万石の墨付を貰い、子の吉里を將軍後継にするという陰謀が書かれてあるので、

柳に犬をあいろろうむつかし

御墨付行義ただしく取りかへし

柳にいつて取もどす書いたもの

と川柳にも詠まれ、柳沢は悔いて墨付を返上したとなつてゐる。それでなお、

すでの事柳百本に成る所

梅柳両木すでに並ぶ所

すでのこと柳が梅にならぶ所

梅は加賀百万石

あてことが八十五万ちがひ

胸算が八十五万石違ひ

十五本なればやなぎも不足なし

とその百万石を詠まれている。後大和郡山に移封されたが、やはり十五万石であった。

楽しい旅行のコンサルタント

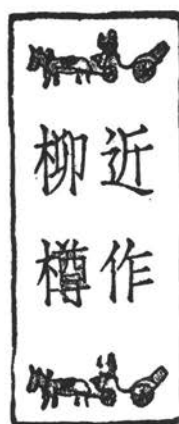
イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588



菊沢小松園選

島根県 小砂 白 汀

保護色を背負うてバツタ疲れはて
蜘蛛の巣にゆうべの霧が引っかかり
プラトニックラヴで生まれた川トンボ
オリオン座三角関係たち切れず
ガスボンベある日爆発したくなり

京都市 明 嘉彦

雑巾の手から幸せこぼれそう
かかわりはないが眺めている船出
イヤリング郷愁のない灯をはじき
一度ではつかぬライター借りられる
焼け跡へとどめのように雨が降り

姫路市 前田 芙巳 代

いつか憎くまねば往く道が遠すぎる
氷点でどんなかたちに耐える愛
赦るせない夜 ボタンホルのゆるみさえ
秋風にそっと返した溜泪
主義を説く男は靴を汚さずに

竹原市 岩谷 二三 枝

今日を生きた証 夕陽の幸に
青年の思惟果てしなき鱗雲
持ち駒の弱音を知っている掌
手鏡にほんとの貌が歪んでる
逆らわず許さず水藻 水に揺れ

竹原市 三宅 不 朽

虫の音の途闇夜のただならず
人妻の恋にも似たり曼珠沙華
姿見へ女 女として怯え
学歴の通りの父よだから好き

竹原市 森 井 菁 居

非力なるミミズは土へ潜るのみ
運の無いヨットは逆の風を受け
つましく咲いて茶人の目を捉え
あでやかに開けば最早萩でなし
崩れない積木がほしい夜である

竹原市 脇 本 政 己

造反にて野に赤し曼珠沙華
亀裂また広げる草に宿を貸し
祝日の今日は地下足袋が重い

出雲市 王

幸運の流れが消えていた足下
人間の哀れを神が押しつける
葛かずらの執念全山舐めつくし
その中の大きな夢は伏せておき

大阪市 河野君子

心の洗剤今のわたしに見当らず
秋風が心に染まぬ針持たせ
速達は字まで跳んだり走ったり
貫禄を見せる和服で客を待つ

島根県 堀江正朗

闇に馴れ肌に味わう四季の音
義眼入れてもらって僕の朝になり
遠慮ない時計が憎い朝の床
耐えられる限度を知って柿実る

岐阜市 市川鱗魚

母一人のらりくらの子信じ
気位に昔も今も城下町
嫁が来てからの漬物石を変え
羽織着る母には結ぶ紐が好き

倉敷市 小野克枝

背伸びせぬ人の素顔の温たかさ

これ以上反対したら敗となる
他人から見れば幸せそうな灯り
遠くから送ってくれた人が好き

島根県 堀江芳子

娘と出る日娘の好きな柄着せられて
真直に今日も歩いた日記閉ず
对等の意見母子の域を捨て
夫の手の届く範囲に置いて留守

八代市 船木史朗

現実と妥協した日は日記書かず
深海魚みたいネオンの下で生き
ためらいも見せず足音遠ざかり
コーヒーも冷えて女が爪を噛み

鳥取市 稲村光枝

目に見えぬもの追いかける日が続き
抜け道に目を向けまいと歩を合わせ
知り過ぎて許す心の揺れ動き
菊の花今日は私の為に活け

東大阪市 落合思月

ハイミスへ秋風一としお身にしみる
栄光と悲劇その日の運不運
絶好のチャンスを父と母がもめ
信念をまげず職場に友もなし

大阪市 堀口欣一

仕事着として今日も着るタキシード

店構え昔のままの雀鮓

デザインを凝らして見ても妊婦服
橋の名がまた消えてゆく停留所

米子市 増田竹馬

皆抜いてしまえと歯医者軽く言い
何流か知らず床の間はめておく
医院開業サクラも雇いたい気持ち
世界二位の実感湧いて来ぬ不満

和歌山市 増田次章

いつからか針持つ母に祖母を見る
初恋の人のうわさをちらときき
四十の恋本物になりはじめ
お豆腐の厄日供養の針を受け

和歌山市 増田めぐみ

木の実抱く木の葉もやがて散る運命
夕月を一人一人が胸に抱き
幸せは大地の上で会えずとも
青い鳥憎まず嘆かずふりむかず

大阪市 小谷葉子

或る女 私のカラーは違います
奥様と云われる歳になり申し
手のひらに愛の証しを書く君で
掌の愛の証しは風に散り

大阪市 江城修史

斗病十年いのち子のもの妻のもの

今一度逢いたきひとよ霧の中
明日知らぬ愛にも女はバラを抱く

東大阪市 宮西弥生

緊張がゆるんでからの物忘れ
女性上位あきらめきれずに来た家裁
噂もう薄れ蒸発戻って来る

守口市 岸本豊平次

月曜の靴は朝陽をはね返し
無縁仏去年の種子で咲く鶏頭
狐だって嫁入りをする通り雨

大阪市 小出智子

望郷の心に染みる彼岸花
菊活ける心は秋に素直なり
水の如く空気の如き母たらん

大阪市 黒田真砂

愛の歩巾揃えて今日も共稼ぎ
生花活ける妻の座確と感じつつ
はがゆい程内気なところは親ゆすり

松原市 守屋万竿

日本の空では予報通り荒れ
空の青よく来て呉れた赤とんぼ
スピーカー日本語らしいのをがなり

倉敷市 本田八笑人

二等車で喰ったら旨い幕の内

浪速紀句（二句）

堂島も大中小の土性骨

北浜で乗ればメーター気にならず

岡山市 谷

森 和 風

一本になってマッチのありがたさ
百キロのスピード地獄へつつ走り
処生術腹とは違うとも言ひ

鳥取県 両

川 洋 々

想像にまかせて置けぬ噂なり

新米に遠く古米を炊くけむり

ほんとうの涙一人になって拭き

京都府 福

村 飛 龍

菓屋に勤めてサンプルまだ服まず

蛤がたった一つのお吸物

味噌くさるとは失礼な僕のうた

鳥取市 近

藤 秋 星

モーニング脱いでふだんの顔になり

慰めにならぬ言葉を置いて去に

深み行く秋にこおろぎ息が切れ

和歌山市 大

家 守 夫

扇風機の風切る音も古くなり

図書館がこみあいはじめ夏終る

うちの子も買って来たのかカブト虫

河内長野市 井

上 喜 醉

開通の朝へマニアは身構える

叢虫の住み家になっていく枯葉

だしがらにされて停年落ちつかず

竹原市 生

信 笑 子

夕焼けへブランコツだけ揺れる

薄き日の命蝶々の死に出合い

この道を行こう女という定め

和歌山市 仮

家 和 美

夕やけの両手ではさむ角封筒

いと小さき我が詩届けよ秋の風

こおろぎよ今日の時計も打ち終る

宿毛市 瀬

田 美 知

渡り鳥落伍しそうなのが一羽

夕やけの道に落葉の詩があり

コスモスの陽をすいつくす紅い色

愛媛県 嵯

本 満 子

肩書へ肩身の狭い花名刺

恐妻の課長部下への風当り

へソクリはさせぬと物価又上り

松江市 大

峠 可 動

栗一つ阿呆のように空を見る

片仮名に惜しい真赤なバラの花

急停車に文化日本の断末魔

富田林市 木

村 弥 栄 子

叱るまい金の卵が消えるから

残燭の焰今のは果に燃え

一言が冷えた体に暖を呼ぶ

熊本市 黒田 緑

断絶というまい子には子の行く手

その辺に居そうな人で親しまれ

秋だナ―絵になる柿を手にくける

富田林市 川端 東雲 棧

秋風に散りゆきそうな柿一つ

永遠の別れ霜夜に星の降る

わが路を断ちてゲバ棒悔のこり

今治市 古野 伶人

腰紐は突っ立ったまま締めさせる

編棒を持った片手で釣を呉れ

愛犬が用を足す間はそっぽ向き

今治市 真山 国彦

のけぞった姿勢で妊婦よくしゃべり

内職をしよか二号になったるか

無理をした旅館風呂場が五階下

鳥取県 林 露 杖

中共の月も戸迷う灰神楽

秋深しバンドの穴が一つ伸び

飲む口が飲ませる口に乗ったまで

鳥取県 鈴木 村 諷 子

じわじわと柳に風でまだ達者

幕詣りしてるに誰も見ておらず

現実にもどった朝のもどかしさ

大田市 藤田 軒 太 棧

義理欠かぬために七円で済ましとき
計数に弱いが結構繁昌し

夫々の癖が出ている待合所

大阪市 平井 露 芳

聴診器腸の不満も聴いてやり

お隣りもAイコールうちもAとする

コマーシャルきわどいところでばつと消え

和歌山県 ふきあげ 虎 城

ささやかな抵抗鉛筆とがらせる

冷やかにカットグラスが夜を笑う

せてものの抵抗ふりむかないでいる

大阪市 広畑 賛 平

会うて見て期待はずれの紅一点

石ブームやがての今は邪魔になり

断絶をさすも守るも三代目

島根県 梶 み どり

お茶ついで注がれて丸く今日も生き

夕顔に話しかけたい今日のぐち

何時までも磁石のような母の愛

広島市 榎 田 英 詩

人の手を転々ダイヤの無表情

帰る日を信じて鳥籠あげたまま

背伸びしすぎて鶏頭風に負け

大阪市 松岡 進

サンマさえ思い出の中の魚となり

ブームでもダイヤモンドは見てるだけ
金も名もないが涙はもちあわせ

大洲市 堀 内 曉 風

諦めがついて見上げる広い空
生花展師匠の手入れで出来上り
血統書自由な恋は許されず

倉敷市 竹 内 翁 童

あけ渡す庭に草花まいておき
大金は三時過ぎてても扱かれ
パパママと呼ばせてみても庶民の子

大阪市 里 小 路

嫁貰う気はなし車乗り回わし

地下街の方は詳しい娘にまかせ
お向いは守口という道の巾

尼崎市 中 谷 利 美

立ち読みの知恵で課長に見直され
下降線たどる人気へ脱ぐときめ
秋風とともによくなる子の寝相

京都府 菊 沢 破 天

まっすぐに歩いて来たのにはねが出来
合槌を打てば調子に乗って来る
なるほどとうなずかすのに骨が折れ

竹原市 蓑 田 浄 美

その向こうに明日があるから信じよう
ニッコリと笑ってピエロになっている

その言葉信じて待ちます手の温み

仙台市 川 村 映 輝

大学の屋根から消えた鳩の群
ご祝儀にもらった金をご仏前
月よりも癌の正体知りたがり

高知県 山 川 勝 子

夕顔の気まぐれ隣へ向いて咲き
衣替え手提の柄も変えて持ち

八尾市 高 杉 千 歩

賑やかな先客のありバラ匂う
おしゃれすることも楽しき秋となり

河内長野市 森 本 黒 天 子

朝刊の立読み出来る所在なさ
ガイドにしておくにはおしい節まわし

大阪市 藤 田 頂 留 子

学説の不粹ベールをはいで行く
ほうき目のあともう病葉の二三枚

大和郡山市 中 内 孚 彦

都会の顔右翼左翼の演説会
負けまいぞユダの心見せられて

羽咋市 三 宅 ろ 亭

八台機屋今夜は妻の寝ずの番
まばらなる駅で乙女の髪を梳き

鳥取県 大 山 果 風

一代で終る農家の覚悟決め

名月に苔まで分る庭の石

大阪府 西 本 保 夫

地理不馴れすぐタクシーを停めるくせ
時計さえ見えぬ机で平社員

今治市 渡 辺 南 奉

エプロンを真白く干して充ち足りる
言い出せば泣けそう会釈だけに

広島県 南 条 露 声

望郷の瞳にえがく秋祭り
間違つて全快したので藪を褒め

松江市 村 松 醉 歩

親不孝雲は動かぬから目立ち
巻紙に書けば候文匂う

七尾市 松 高 秀 峰

本当の味方はずけずけ物を言い
性格の合わない事にして別れ

鳥取県 川 崎 秋 女

家のこと娘のこと三つ四つ身体ほし
生きのびた蠅が日向を恋うて寄り

島根県 志 賀 美 栄

名月をはりつけにして秋の天
鶏頭の孤独真紅に燃えさかり

神戸市 横 山 孜 孝

慢性へ薬草の匂い部屋にしみ
胸襟を開くに酒とは都合よし

高石市 井 関 三 幸

母なれど女の業もまだ消えず
許されよ聖女になれぬ未亡人

今治市 今 井 松 花

銭湯に一人ではいる豪勢さ
冷し飴コーラなんぞに負けまいぞ

和歌山県 加 納 花 秀

灰皿が出てなく一ったん外に出る
ミニのすそつかんでヨチヨチ子が遊び

竹原市 時 広 一 路

温室に散り時知らぬまま育ち
一步二歩離れ絆の強さ知る

島根県 中 島 英 子

今日だけが皺のめでたい敬老日
本業を守るに迷う世の動き

岡山県 武 元 柳 子

石棺に金魚悠々泳いどり
稲の穂に見えかくれて姉妹

寝屋川市 福 富 隆 子

来年も生きるつもり衣たたむ
恋人が出来てふぬけた娘にも見え

笠岡市 山 本 柏 生

記念碑に古城の跡を偲ばしむ
招待席上品ぶった顔そろえ

兵庫県 高 橋 近 江

活け替えるお花トイレへ左遷され
同権が客前だけはまだ残り

大阪市 岡 本 まさひろ

せいてるのに今日の特急のおそいこと

高う飛んでもジェット機まだ秋空の下

貝塚市 行 天 千 代

気苦労が山程有るよな顔でなし

近代化切符買うのにも苦労

大阪市 河原林 比呂路

公害に耐ゆる他なしやせ雀

ハイウェイ浪花の情趣もう見えず

大阪市 国 広 ひ さ 絵

越して来た浮世の波の面白く

つねられたアトつけたままパパ出勤

鳥取県 福 田 保 子

二児母に預けて通う自家用車

足音を遠くに聞いて恋終る

羽曳野市 麻 野 幽 玄

道草の云い訳子供なりの知恵

インターホン子供の足音遠ざかり

石川県 同 村 虹 要

女中さんチップ貰った声になり

奥さまの指揮下に入る大掃除

岡山県 山 田 止 水

逃げるよに出た故里にある不信

賽銭は値上げも出来ずおわしまし

守口市 樋 口 一 峯

ミニ楽し貴女も良い足してまんな

片時と言えど雑草油断せず

諫早市 原 田 明 春

冷たんな妻にネオンの灯がさそう

こうもりのようにパパの夜警員

鳥取市 藤 本 鎮 也

自然美をこわして砂丘へホテル建つ

羽衣の方がよかった宇宙服

鳥取市 藤 本 和 宏

心までけがすな白い菊が咲く

どの部屋も逃さず襲う稲光り

鳥取市 藤 本 恵 子

怒ってる顔にカナリヤうたいかけ

無理やりに咲かせた花と蝶知らず

兵庫県 不 二 本 和 久

又今日もやりこめられた子の育ち

指圧して来たた浮気がまだ止まず

米子市 源 氏 勝 久

はだかでもよいと親父も惚れている

肩こると言いつつ孫は抱きたがり

京都市 藤 本 征 山

売れるからよろめき小説生きつづけ

よく切れる人とは見えず病んでいる

鳥取市 藤 本 佳 女

冷房の利かぬ暑さへ稲育つ
顔色に自信の程がうかがわれ

鳥取県 藤 泰 嗣

初恋であつたと子等に言える幸
胸見せるだけでも女生きてゆけ

鳥取市 河 口 忠 志

もの言わぬ涙鋭く胸を射し
長話足のしびれへ聴いていず

鳥取市 米 原 一 稔

考えがまとまりグラジオラス活く
穏かな日々に昼寝の癖がつき

鳥取市 夏 目 葉 舟

折り鶴を孫の指から教えられ
人は皆いい考えを出す気がし

今治市 原 田 輝 親

雲に入り雲から下りて山仰ぐ(岩木山)
群像の作者鬼神の外に無し(仏ヶ浦)

羽曳野市 飯 田 一 治

恋人の氣持をさぐる嘘をつき
義理を欠くことも知つてる金を借り

高槻市 山 田 ス ミ 子

衣替えて今日しみじみと秋深む
無駄足を承知お役所へ足運ぶ

大阪市 花 田 繁 子

食欲の秋と戦うふとり過ぎ
在りし日の老母の心わかりかけ

大阪市 斎 藤 三 十 四

マイホーム日本の地図に俺の土地
断絶の街にゲバルト吹きすさぶ

大阪市 村 島 秀 村

手を取 て遊ばした孫に手をひかれ
マイホームの夢で小山が削られる

大阪市 鈴 木 生 仏

ガラス張り鯉も五年の顔馴染み
老眼と知つてか兎逃げもせず

大阪市 松 岡 茶 々 坊

入院が長びき人間模様知り
あれこれと病の床の寝ぐるしき

大阪市 木 村 浊 水

この夏も決り文句の見舞状
恩給も雀の涙ほどアップ

大阪市 大 西 為 二

父親に似ぬ子に二号安心し
糸屑に出かかる指の満員車

大阪市 吉 野 志 津

雨の日にかささしかけてからの縁
神様の五穀豊穡むだとなり

大阪市 田 中 多 幸

敬老の日はまだ働ける御挨拶

愛媛県 西田 富士夫
鉢巻きを忘れてタオルまだたずね

鳥取市 山本 珂也女

座ふとんを枕に眠る疲れよう

鳥取県 林 すみこ

駅前足をうばってスト続く

札幌市 平野 青夜

香港の花に埃が積って居

新潟県 高野 不二

校長が酔うから無礼講になり

奈良市 桑原 千里

買わぬ品まで批評して旅の雨

西宮市 加納 聖司

また口が一つふえたと小鳥飼う

鳥取市 有田 鹿の子

夫婦病んで健康の価知らされる

和歌山市 島本 泰子

米粒のダイヤが欲しいマネービル

泉佐野市 大工 静子

丹精の花へゆるゆる通るへび

大阪市 木村 久子

孫に手をやいているのに犬も飼い

大阪市 田沼 一登

舌三寸ちよつとすべって断絶し

大阪市 今井 隼人

にぎり寿司わさびがきいた顔になり

★ 新人の原稿 ★

新人にスペースをさいてはどうかと、同人総会の席上でも提案された。そのほか直接、編集部でも新人の原稿についていろいろご意見をうかがっている。

なかには、依頼もされないのに書きにくいという人もいるが、依頼原稿をまともに書いたらプロである。たとえば先輩の句をイトモ簡単に書いてくるが、十中の八、九までは「正確」ではない。かなづかいどころか、句のまちがっているのが大半である。それを編集部で調らべな

いのはうかつであるという人もいる。編集部では誤字や当て字を訂正するのがつとなので、こういうことは執筆者に責任をもつていただきたい。

ハガキや便せんに原稿を書いてくる人も相当にある。原稿はそのまま印刷所へ送りこめるものにしてほしい。

二枚で充分の「内容」を五、六枚に書かれたり、ペンをとれば、いつもだれかの欠陥をつきたる人などの原稿はこまる。

建設的な原稿なら新人を問わずドシドシ送っていただきたい。

(F)

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 三四五二一四

夜間 06 四四〇八



「秀句鑑賞と梅志句集」 披露の会

東野 大八

後藤梅志先生全快祝い謡曲会および梅志句集出版披露の会が、十月十八日午後一時から大阪市関電共済会館で盛大に開かれた。

謡曲会の方は、満堂の和室いっぱい音吐ろろうの祝いの曲が次々うたい収められ、その謡曲会代表と川柳界有志の合同祝賀宴は午後三時からである。出席者しめて三十人である。

桶高薫風さんの手際よい司会で、この方の会は、まず川柳関係で蓋をあけ、主賓格の中島生々庵川柳塔主幹が起って、麻生路郎先生の「川柳雑誌」のむかしからする川柳家として梅志先生の想い出を柳人らしいさばけたタツチのスピーチのあと、堀口塊人さんが「梅志句集」をめぐる話を得意の博識ぶりにユーモアをまじえて和やかに一席、清水白柳さんがあとをうけて、柳人の生年月日の面白さをご披露。このあと梅志さんの多年にわたる友人知己の人々による人間梅志のむかしを語る

織細豪放を織りなす人間梅志の懐旧談がつづく。

紋服りりしくいつもの古武士の風貌よろしき梅志さんも、祝辞、スピーチの一語一語に耳かたむけうなずいたり、破顔一笑の連続で終始ごきげん。かたわらのけう子夫人も、時折は眼頭をおさえては、夫唱婦隨の五十年に千万無量の涙、涙である。梅志さんは横眼にじろりとそれを眺めながら、おもむろにこう謝辞をのべられた。

「本日は日ごろ敬愛してやまぬ忘れ難いわが生涯を飾っていただいた人々のご参集を願ひ、この歓喜を愚妻ともどもかみしめていく喜びは、生あらばこそその歓喜とも存じます。思えば過去五十年波乱曲折のわが生涯に對し、ここに控えております愚妻も尋常一様の夫婦生活ではなかったと思うのでございます」

といかにも梅志さんらしい、誠実辛直、淡如

たる愛妻家の風味十分の述懐に、満堂ただ深い感銘にただうなずくのみ。

句集は種々の印刷上の手ちがいもあり、席上で手することはできなかったが、予定の句集の巻頭を飾る短冊の一句がプロマイドにまとめられて、一座に配られた。

一月燦々踏切小屋が寝静まり

の流麗な梅志さん特有の典雅な色紙がそこにあり、一日も早い句集の刊行がまたれる想いであった。最後に梅志さん出題による「初恋」東野大八選で披露し、梅志さんの愛妻婚記五十年の喜びを讃歌し、梅志さんご夫妻の賀寿多幸を祝福する万歳三唱を行い、一同万雷の拍手をおくった。人間愛と夫婦愛に彩られた柳人梅志半世紀を寿ぐ会はこうしておひらきとなった。

梅志金婚の祝い席上題

「初恋」

東野 大八選

初恋は甘くせつなくはずかしき 福地 慎夫
初恋の味知らぬのにこれは無茶 城戸直治郎
初恋のあの娘はいまも十七つ 岡 きらを
その昔思ひ出になる五十年 稲田幾久雄
初恋の顔に年輪五十年 葛山いほを
初恋を知らず女房にはれなおす 竹内 叶彦
しりぞめし恋の心もしこめゆえ 米田 寿子
弁当の替房にだけはそつと伏せ 楊枝 毅一
初恋はプリンばかりを食べていし 近江孟子

初恋を句に作れとはそりや無理よ

情熱の余じん初恋の人しのぶ
今日は七夕さままで終つてゐる恋ぶみ

黒田 ユタカ
西出 一栄

初恋の二字の書けない恋ばかり
初恋のかなつた顔のめでたさよ

後藤 梅志
大角 雅子
高崎 素子

盟友梅志と私

俳友 葛山 磐次

私と後藤君と友人としての附合いは実に五十五年に渉ります。

大正五年、彼も私も東京の興業貯蓄銀行に勤め、彼は京橋の本店に私は芝の支店勤務の關係で、毎日前日の預金を現送する毎に彼と顔を合せて居る間に親しくなりました。

兩人共明治二十七年の午年生れ、私が二月彼が十月だから、私が兄分です。万時は彼が兄のような間柄でした。私が病氣で数日寝付いた時、日も浅い彼は自分のマントを貰入して薬代をみついで呉れた事もあり、若い時から義侠心の強い性質の持主でした。

彼は店から近かった、兜町の株式取引所へ暇があれば出掛け、場建ちの様子を目をこらして眺めるのでした。当時は先き頃の様にジツカー機も無く十数人の仲買人が売買の手を

初恋のまま金婚の夫婦誓
初恋も鼓のさえも五十年

清水 白柳
中島生々庵

いが栗の中味初恋の味だつた
初恋の人ととも角五十年

福井野迷路
菊沢小松園

初恋のほくろ紋白蝶の紋
初恋の頃の切手が高くなり
初恋の味とりどりに五十年

橘高 薫風
堀口 塊人
東野 大八

振るのを、上段で受けて居る立合人が記録係り一人を間に挟んで左右の耳へ継ぎ込む、売買の店名、銘柄を速記以上の早さで記録する神技とも言ふべき敏活な動作を釘付にされたように凝視感激、彼の商魂は此処で育てられました。

商都は何と云つても大阪だと彼の決心は堅く、私が郷里兵庫県へ帰って間も無く東京を見切つて来阪、大阪生活が始まりました。自分の意志通り北浜の株式現物店、福井商事に勤務して店を牛耳る迄になりました。其当時前の勤先興業貯蓄銀行での先輩で、博洲生命保険会社大阪支店長として在阪の石川有延氏が昔馴染ですので同家とも親交を受け遂に石川氏の令妹と結婚しました。それが現在の奥様です。

石川家は昔京都守護の北面、南面等と云つた武家の家柄で、そんな關係から石川氏は謡曲の大家であり、令妹は鼓の達人だった事から彼が今日謡曲で身を立てる基礎を育くまれたものと思います。

又石川氏は姓名判断に明るく、彼の戸籍名喜四郎、私は玄なのですが、彼は房三、私は磐次と改名して、今日迄俗名で通して居ます。其後福井商事が不振で解散しましたが、在店当時株式界の大店、静藤次郎商店の社長に見込まれて静さんが経営されて居た九州の炭鉱の支配を任されて西下しました。何箇年かの九州生活が続き、再び大阪へ帰つて来ました。終戦当時私が宇治電ビルの営業を担当して居ました事から、ビル内の売店経営を御世話しましたが、奥様の御仕事として今日迄続いて居ります。

其当時から彼は食満南北、岸本水府氏等とも親交があり、川柳の研究に没頭しました。彼は何事かを手掛けると、それに熱意を傾け其奥を極める質で、謡曲然り、川柳然りで川柳誌「川柳塔」に連載された、梅志の「秀句鑑賞」を私は毎号楽しみに愛読しました。故麻生路郎さんが、彼の選句、作句には折紙を付けた程ですから、今さら私が下手な讃辞を呈する必要はありません。彼は水戸の出身ですから、恐らく水戸老公の梅里公にあやかって、梅志と名付けたのかとも思いますが、好漢梅志の句集の出版を心から喜ぶ友人の一人で御座います。

(原文のまま)

パ
パ

水粉千翁選

鼻声でパパと呼ぶ娘に金が要り
 パパさんと抱きつく分だけ高く
 生活の糧パパが来る化粧する
 片隅でマダムのパパが飲む手酌
 パーテンの陰のパパからあやつ
 欲しいもの買つて貰える別のパパ
 別宅にパパと呼ばれる人が住み
 パパ所詮ママの引力圏の中
 パパらしいパパはお酒に酔つた時
 パパとママ喧嘩したよと里へ告げ
 母ちゃんの方がよいナとパパ思う
 パパよりもママは強いと子も思い
 壮健なパパまだ赤いシャツが好き
 泣き出さずママママと抱き来る
 迷つた末パパと呼ばせることに決め
 パパと来てママに見せたいものばかり
 同窓会ミルクもパパに頼んどき
 よいパパと云われ連休疲れ果て
 パパが先ず言えてママさんあう気味
 パパと呼ぶはずんだ母の嬉しい日
 ママからの話はパパがさきに惚れ
 パパ少し可愛想よと娘に云われ

佳女 和久 南奉 止水 緑明 宵明 白汀 七面山 鶴丸 可住 無閑 素身郎 保子 柳子 芳子 礎山 光枝 里風 桃路 伶人

酔うてきたパパを上手に真似ても
 一度だけ呼んでみたいねえパパ

佳

パパが居るから日曜と子が覚え
 小児科へパパの慌てた走りよう
 産院でパパが来たとは俺らしい
 パパパパと呼んでも親のことでも
 パパになる息子へ頑固負けている
 車庫の鍵掛けて私はパパとなる
 相談をしているうちにパパになり

人

パパと呼ぶ女と似てず泊り客
 地 章雅

黒い子がパパを教えて欲しくない
 天 克枝

軸

パパが居てママがきれいな日曜日
 静歩

舶来のやつぱりママがパパを敷き

忘年会

松下たつみ選

忘年会みんなが酔て楽しそう
 忘年会別に忘れることもなし
 忘年会続く酒量へ気をつかい

呑み助が浮き足立つてる忘年会
 ボーナスも忘年会も無い生活
 好きなもの同士が寄つた忘年会
 忘年会幹事は別に飲むプラン
 忘年会飲む相談はすぐ決まり
 忘年会疲れ大事な用を抜き
 雰囲気が好きでついで忘年会
 おしるこの忘年会へも顔を出し
 忘年会帰えりは別な道を行く
 来年は社の人でない忘年会
 大過なくすんでめでたい忘年会
 忘年会済めば禁酒をすると言う
 部長室の予定表にも忘年会
 二次会で未だ物足りぬ忘年会
 忘年会思わぬ人のかくし芸
 お茶の間でママも飲んでる年忘れ
 忘年会払いの方は年を越し
 忘年会だしに毎晩飲み歩き
 忘年会定年組は騒がない
 ボーナスはポケットにあり忘年会
 乗車拒否忘年会の酔い又さめ
 忘年会昨日の顔が又さめ
 忘年会音痴の歌を所望され
 忘年会またそのことに触れたがり
 忘年会飲む気か今日は歩いて来
 忘年会幹事の猪口は冷えて居り
 忘年会酔えは会長おもしろい
 忘年会かけもちという役があり

止水 扇風 思月 芳子 新之助 保夫 里風 桃路 宵明 白汀 弘朗 秋月 征山 里風 伶人 綾女 素身郎 虹要 章雅 柳子 祥月 古方 無閑 春日 和久 芳仙

佳

一年の速さしみじみ忘年会
ストープが出たら忘年会のこと
忘年会病氣上がりをもと忘れ
忘年会間近か手品の種を買い
男さまざま忘年会を女見る

忘年会千疊敷で酔いつぶれ
地 初甫

熔鉱炉は今日も燃えてる忘年会
夫 古方

盃へ酌いで今年が飲み乾され
千翁

顔 色

山上千太郎選

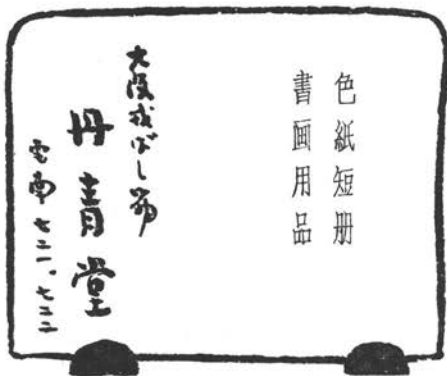
動揺をそのまま顔の色に見せ
顔色で子のいつわりを見逃がさず
読まれてる顔色ごまかしも利かず
顔色で今日の入試を信んじとり
顔色へ室内それぞれめくばせし
良心が顔色に出てしかられず
顔色が変わり震えが止まらない
顔色を読んで無心の話題かえ
発表に悲喜交々の顔の色

七面山 佳女
恵子
隆子
英子
代仕男
双楽
無閑

顔色を見損なわない程の酔い
顔色が悪いと鏡に注意され
無事と云う声に顔色とりもどし
顔色も変えず聞いている太つ腹
顔色を変えて潔白云いつのり
快方へ向く顔色をばげまされ
顔色ばかり見て定年を無事むかえ
つやつやと光る顔色まで憎し
顔色もよくなり病床金のこと
湯上りの顔色揃う旅の膳
顔色を変えてあわてた声がくる
施設の子顔色を見る癖がつき
顔色も変えず嘘つく顔を見る
また来ると顔色読んだ顔で去に
顔色が本音を吐いた黙秘権
拿捕されたニュースへ家族顔を変え
顔色に出す正直を愛される
手術する前の顔色とりもどし
退院日医者も顔色ほめてくれ
顔に出てましたかナアと汗を拭き
馴らされて顔色を見る犬となり
電話ベル顔色かえる事が出来
二人目の母で顔色気にする子
やりくりのつかぬ金策顔に出る
顔色を変えているのは医者の方
顔色を変えぬ準備の息をつき
顔色を見えぬ電話へ念を押し
佳

古方 道雄 藤波 曉風 翁竜 克枝 素身郎 可住 虹要 初甫 正朗 肖二 光枝 里風 扇水 魚山 宵明 和宏 芳子 葵水 どんたく 不二 思月 同柳 同子 止水

お願いがあるのにパパの浮かぬ顔
手術室出る院長の顔の色
ウナ電を読む顔色へ顔が寄り
実力がないから顔色もう変り
顔色に出すとは俺もまだ小物
人 伶人
顔色が見えて来そうな電話口
地 芳子
顔色に見せず悲しい酌をする
天 芳仙
顔色に出さぬ男と恐れられ
軒太楼



初歩教室

— 題 —

「涙」

本田 恵 二 朗

私の句を掲げて語るのは、元来好まぬ私で、いささか面映いあまりにも我が意を得た言に出会ったので、それを当教室の仲間に味って頂くことにする。筆者は、岡南川柳会を主宰する鴨井昭夫氏（内科医）であるが、その柳誌の巻頭言に「大衆との接点」と題して、次の如く述べておられる。

「足跡を残そう砂のある限り」

これは恵二郎氏の作で本年度川柳塔社の路郎賞に推された句と聞いている。よく判る表現で、ほのぼのとした感動を与えながら底知れぬ力強さを以て迫るものがある。私は近來革新的な川柳に共鳴して、伝統的なものから遠ざかる傾向にあったが、この句に接して、新しい感動を覚えた。勿論句が秀れているからでもあるが、一般的に言って、長く同傾向のものに接していると慣れが生じてその良さを、良さとして感じなくなるものだし、暫く遠ざかって久し振りに接してみると、又新し

い感動が起るものである。こうした感性復帰は自然現象の中に数多く見られることで、川柳に対しても、或る程度あてはまるように思う。そこで、私は川柳大衆化運動について思う。私達は川柳の良さを知っている。知っていないが、個々の句に対しては慣れのために、その良さを見失っていることが多い。しかし大衆は感性復帰など無関係に、初手から白紙であり、新鮮な感性の持ち主であるから、川柳大衆化という観点から、川柳と大衆との接点を考える場合、やはり判り易い表現で内容豊かなものを提示すべきで、句として佳きものでも、難解なものを接点に選ぶならば大衆化運動は空転に終るのではないか——以上要旨を掲げた。味わってみて欲しい。さて長い前置きとなったが、今月の熱吟に体当りなところをみることにする。

千代 勝気また涙と眠る夜を持ち
千代 理性とは別に睨み泣けてくる

素晴らしい進境だ。川柳が貴女の人間性をだんだんと高めて行く。川柳は貴女の宝物だよ。天皇さまへうるむ目明治を笑われる 一二三笑われてもかまわない。こんな考えも残っていてよい。私は日本の良さだと思う。

女の涙乾くのもまた早し

孚彦

女の涙嘘を嘘と言わせない

孚彦

女性軍が、あんたをにらみつけてるよ。でも私もそう思う男性の一人だ。ホラホラこんどは私の方をにらみつけたのがあるよ。

本当の涙女優の母が死に

独仙

演技でない涙、本当の涙、尊いものだよ。

鼻唄の目に玉葱が突き刺り

勝子

この涙も演技ではないが、涙にはちがいないし、罪のないユーモラスな景色だよ。

マスコミは無情涙に問いかける

軒太楼

この調子があなたの本物だ。さあ前進だ。

思い出が涙ぐませる彼岸花

静観堂

彼岸花の咲く頃ともなると、涙ぐまされる思い出、それは深酷な思い出がなつかしい。

つけ腫みアラまあ取れた嬉し泣き

大吉

なんとも朗らかな風景だな。進境を認める。

悔恨の涙と信じよう信じよう

義一

信じてやることを彼を励ますことになる。

愛称で呼びかけ弔辞泣いている

竹馬

それを聞く者も天地も共に泣いている。

発車ベル涙袋をパンクさせ

泰子

別れというものは催涙ガスみたいだよ。

口下手の同情目頭光らせる

舌先きの同情とは格段の違いだな。

さてこの辺で、仲間の苦吟、熱吟のオンパレードにはいることにする。

うれし泣き僕も貰つた一と雫

なまじ血も涙もあつて共倒れ

老いの身の涙袋はよく破れ

涙の目真すぐ向けた妻の勝ち

せいたくな涙を遠く遠く聞く

微笑んで別れたあとに出る涙

涙もう涸れてところを取戻し

泣く奴があるかと父も泣いて

玉葱のせいにしてゐる貰い泣き

もらい泣きの顔で欠伸噛み殺す

アイライン涙ふくにもテクニク

我慢した欠伸涙に化けて出る

照れ臭い涙おでこから拭きはじめ

優勝の涙拳でぐいとふき

涙涸れ母今日からの寡婦の顔

秀村

近江

新之助

芳進

美代

美代

三幸

誓二

利美

贊平

静子

満津子

比呂路

千里

弘生

露杖

父老いぬこんなドラマに涙ぐみ
貰い泣きの方がたとこぼして

涙涙で綴つた栄光の一頁

流してはならぬ涙がのどで鳴り

妻子には男の涙見せられず

涙パフで叩いて割切る若さ

紅涙をしばつて視聴率を上げ

再会の目と目に玉と光るもの

痛さよりくやし涙の負け喧嘩

親なればこそ意見へ涙添え

不覚にも唾の涙にしてやられ

止まらない笑いへ涙出しはなし

ひからびた涙が慰謝料驚づかみ

子に逝かれほんとの涙の味を知り

ばあちゃんへ唾の涙の手をつかい

泣いてゐるこは師匠も泣いた部屋

倅せぬ涙やさしい子らという

茶の間では涙の追憶語るまい

上向けば感涙鼻からこぼれ出し

終幕へ涙の顔を見つけれ

仲美

初甫

致孝

光枝

和風

露声

万竿

愁電子

加太

多幸

生仏

繁子

儀一

久子

志津

為二

隼人

茂美

止水

弥栄子

ハイミスの涙見せない意地あわれ 保夫

お手軽に涙流せぬアイシヤドウ 濁水

一と雫こぼして返済のばさせる 肖二

わだかまり溶かす涙のあたたかさ 綾女

言いたいことは、よき句材をつかみながら、

舌足らずや、着飾り過ぎて、野暮臭くなった

りしたものが多数見受けられたことである。

もっと、もっと、練らねばならない。苦しま

ねばならない。この教室の仲間の長所は、素

直であることだ。素直であることは、必ず進

歩する素質があるということの意味するもの

だ。私との対決に、一段とハッスルして頂き

度いと願うことしきりである。

☆

十二月二十日〆切「静」（二月号発表）

一月二十日〆切「早」（三月号発表）

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二 千七一一

本 田 恵 二 朗

後藤梅志著

「秀句鑑賞と

梅志句集」

送料共 ￥.550

作句力とその選句眼は、故麻生路郎先生から折り紙つきの後藤梅志氏が敢えて世に問う快著である。
序文に麻生葭乃女史、第二序文に楳元紋太氏、抜に清水白柳氏などが執筆されている。

秀句鑑賞にはあなたの佳句が登場、印刷の關係で四十五年一月下旬発行になります、限定版につき申込みは早や目にお願ひします。
発行所 大阪市南区饅谷仲之町二〇

川柳塔社

大 萬 川 柳

「断絶」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 五百六句
入選 四十五句

断絶の故郷に帰る日の喪服

岡山 久志良

鳥根正朗

断絶をしたら後援者が出来た

高石 好郎

大阪 誓二

過去断つた男の顔に嘘がない

貝塚 つき子

米子 千代

未練絶つ音でポストの底へ落ち

今治 宵明

倉敷 恵二朗

断絶したはずの基仇ふらり来る

八尾 鬼遊

大阪 大吉

断絶の夫婦財布を別に持ち

大阪 弓彦

倉敷 克枝

断絶の垣に真赤なバラが咲き

大阪 小松園

大阪 三十四

新宿の灯へ断絶の虫が寄り

大阪 儀一

岡山 止水

北方の郷土を断絶した平和

大阪 保夫

大阪 新之助

断絶のテープと知らずドラが鳴り

富田林 花梢

大阪 柳志

断絶の子と夕めしの砂を噛み

倉敷 素身郎

断絶を認め一人で酒を酌む

熊本 芳仙

政治から断絶場末の靴みがく

大阪 満津子

断絶をつなぐつもりのか言なり

倉敷 翁童

文明と断絶したいときもあり

岐阜 鱗魚

断絶の周囲無縁の人ばかり

松原 史好

昔ならお家断絶という汚職

尼崎 利美

断絶をいけばん理解してる祖母

倉敷 扇水

断絶の世を元禄という不思議

大阪 小路

大物の強味断絶ほのめかし

断絶をした筈なのに夢で来る

断絶の蔭から母の字で届き

断絶の海へ沈める花を抱き

恋捨てた日から断絶した日記

堺 一二三

出稼ぎの仕送り二度で絶えたまま

過疎の村捨てて出稼ぎそれつきり

皇室との断絶美智子妃が支え

佳句

大阪 あいき

母さんにわかるもんかとの無言

松原 史好

話し合えば合うほどわが子分ら

富田林 花梢

断絶の母を戸籍で知る二十

倉敷 克枝

断絶の戸籍父さんどこに居る

大阪 水客

対話の断絶となじ若い血と言わず

人ノ句

大阪 金三

祖母の守り受けずに育つ核家族

富田林 花梢

断絶の母を戸籍で知る二十

倉敷 克枝

断絶の戸籍父さんどこに居る

大阪 水客

対話の断絶となじ若い血と言わず

人ノ句

大阪 金三

祖母の守り受けずに育つ核家族

富田林 花梢



地ノ句

岡山 久志良

並行線の話は止そうお父さん

天ノ句

大阪 小松園

村捨てた若者同土村語る

選者吟

三権の断絶を見る朝の冷え

大萬川柳四十四年度(第十一回)

ベストテン(十一月現在)

- 一 柳志 大阪二一〇
- 二 好郎 高石一八五
- 三 克枝 倉敷一八〇
- 四 瑞枝 米子一八〇
- 五 天笑 堺一七五
- 六 小路 大阪一六五
- 七 水客 大阪一六〇
- 八 花梢 富田林一六〇
- 九 小松園 大阪一六〇
- 十 鱗魚 岐阜一四五
- 十一 千代 米子一四〇
- 十二 利美 尼崎一三五
- 十三 一二三 堺一三五
- 十四 文秋 大阪一三五
- 十五 素身郎 倉敷一二五
- 十六 慶之助 大阪一二五
- 十七 阿茶 大阪一〇五

十八 曉明

大洲 一〇、五

十九 静馬

高槻 一〇、五

二十 十四雄

倉敷 一〇、五

二一 恵二朗

倉敷 一〇、〇

二二 史好

松原 一〇、〇

二三 鬼遊

八尾 九、五

二四 弘生

大阪 九、〇

二五 久米雄

岡山 九、〇

二六 大吉

大阪 九、〇

二七 里風

倉敷 九、〇

二八 千翁

倉敷 九、〇

二九 素郎

堺 九、〇

三〇 吸江

藤井寺 九、〇

三一 形水

大阪 九、〇

三二 葵水

和歌山 八、五

昭和四十五年第一回

「脈」五句以内

締切 十二月二十日

第二回

「国旗」五句以内

締切 一月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五一六

郵便番号 五九二

川村 好郎

○大会のご案内は次号で発表します。

★

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い、柳界の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもつて目的とす。

二、毎月の出題並びに選は清水白柳氏が担当され、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は公平を期して到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を附記し、順次混ぜ変えて選句する。

三、毎月二十日締切、出題及び入選発表は毎号の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め、毎月のベストテンを発表する。同点の場合其の月の投句先着順とする。

五位 四点 地位 三点
四位 二点 佳句 一・五
平抜き 一点

五、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として年度間の総合点の成績に依り順位

を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦、懇親宴に招待す。なおベストテン第一位には特に梅里賞をもつて表彰する。

六、本会の大会は毎年二月に開催する。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定む。

七、投句その他の連絡先は大阪府高石市高師浜三丁目五一六
郵便番号 五九二
川村 好郎
電話 堺(〇七二二) 六六一六二

営業所

阿倍野店 住吉店 平野店 都島店 今福店 十三店 九条店

crcdit system



丸越

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
TEL 632-3806 3807

月賦百貨店
買いよい
良い安い

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生はすこぶるお元気でいらっしゃるが十月末十一月初めの冷え込みに、今年は少々寒がり屋になったようだとのこと。十一月五日にはハワイからの築山快夢起氏と若本多久志氏との訪問を受けられ、楽しく歓談された。また、「私、近頃は川柳の句会へ出席せずまことに我儘な蜚居生活のあけくれでございますが、もはや頑張りのきかぬ齡でございますから、なるべく他人様の邪魔にならないようひっそりと暮したいと思うております。唯、希うことは、たとえ貧しくとも心のゆとりだけはいつまでも失わぬようにと心掛けております。時代の流れに採まれ採まれて移りゆく関西柳壇の動向をひそかに

会は十月十九日(日) 石山で開催、遠来の浜田久米雄氏、ふあうすと社の梶川蘇堂氏をはじめ多数が出席して盛会であった。

▼倉敷市文化祭協賛鷺羽川柳句会は十月二十六日鷺羽山レストハウスで開催。

▼川端柳子銀婚記念後楽園句会(十月十九日)の寄せ書きを頂戴した。逸見灯竿氏もお元氣な顔を見せられた。

▼かがみ句会(岡山県)は十一月二日池田古心居で。十二月は二日夜、兼題、掃除・たるむ・忘年会・カギ・遠い。一月例会は十日午前十時から兼題、犬・体調・夜明け・交差点・過信、池田古心居で開催。

▼西尾菜氏(八尾市同人)は十月二十六日(日)倉吉市の交通安全川柳大会へ。市内の大橋旅館で一泊、山陰の柳人と交歓された。

▼清水白柳氏(大阪府同人)は十月二十三日甲府へ。翌二十四日善光寺へ参詣された。「富士もよし武田びいきになった酒」

▼東野大八氏(美濃加茂市)は十月二十日から人間ドック入りをして老朽船の修理にかかっておられると。

▼平安六人の還暦の集いに清水白柳・西尾菜・大坂形水・橋高薫風の四人が出席お祝い申し上げた。

▼村上春巳氏(姫路市同人)は第二の故郷の奈良をなつかしみながらも元氣に火力発電所建設に精励しておられる。「塩作る浜に発電所造る音」

▼田垣方大氏(倉敷市同人)は十月十五日肝障害と高血圧のため総社市長野病院に入院加療中とのこと、ご快癒をお祈りします。

▼越智一水氏(今治市同人)は十月十一日長野市雲上閣で開催の第十一回全国郵政川柳大会に出席、往路軽井沢、浅間、小諸で遊ばれた。「噴煙をたのしんでいる野天風呂」

▼句集「白黒記」出版一周年記念、詩と書と写真展が十一月一日から十五日まで尾道市土堂町プランタンギヤラリーで開催。

玉造川柳会 十二月十日(水) 午後六時 縄・締くくり。特別宿題 忘年会 玉造交差点南一〇〇米 大阪信用金庫	堺・若芽合同句会 十二月十三日 午後六時 駆足・窓口・手ぬき 堺市九間町東二丁一番七号 八木摩太郎宅	南海川柳会 十二月十八日(木) 午後六時 クーポン券・伝説・待ちぼうけ ナンバ高架下 親和クラブ	南大阪川柳会 十二月二十日(土) 午後六時 終る・プレゼント・波・多忙 松崎町二丁目 以和貴荘
--	---	---	--

▼八木摩太郎氏(堺市同人)の住居番号が変更になった。堺市九間町東二丁一番七号。

▼林夢虹氏(豊中市同人)は十月二十五日、秋の大山鳥取砂丘、松江に遊び、殊に紅葉の大山の亡び行くものの美しさに讃嘆された。

「砂丘恋塔を築けぬ性と知る」

▼戸田古方氏(豊中市同人)は十一月二日三日の連休を利用して大山方面へ。大山で一泊山の秋を満喫された

▼築山快夢起氏(ホノルル市同人)は夫人同伴の日本観光旅行の途次来阪、十一月五日には生駒町に蔑乃先

生を訪問、七日夜の本社句会に出席、散会後生々庵主幹、好郎、形水、栞、小松園、文秋、多久志、小石、薫風の諸氏と小宴歓談された。

▼柿山絃輝著第二句集「青年」が十月十日熊本市出水町国府二〇八八川柳煙煙吟社から発行された。頒価不明。大島壽明氏の序がある

深海魚それでも愛にめぐり合い——もう忘れました花瓶に花がない

▼福島呼鳥・乱花共著句集「潮路」が十月二十六日神戸市長田区五番町一丁目一五一福島呼鳥方から発行になった。相元紋太・房川素

新同人紹介

堀江正朗

小砂白汀

小野克枝

——好郎・薫風推薦

——緑之助・明朗推薦

生・山本浄平三氏の序文によると月刊誌「うずまき会」を発行し、うずまき句会を主催する呼鳥夫妻は地味ではあるが信頼の置ける作家であることが、紋太氏病臥以来八年以上の歲月、毎月見舞いを欠かしたことがないという逸話でも窺い知れる。

落伍者になるまいとする
巻脚絆——呼鳥
割り切れぬことを割り切りたい夫——乱花

▼沢田四郎作医博(大阪市)は秋の叙勲に勲五等双光旭日章を受章された。沢田先生は民族学の權威であり、現在には本誌をご購読ねがっているが「川柳雑誌」時代は洞友だった。

▼後藤梅志氏の句集披露の会は盛会だった(四六P参照)。なお十一月三日には多田神社三楽園で金婚式も挙げられた。おめでどうござります。

▼王紫さん(出雲市)の川柳塔賞受賞記念句会がいずも川柳会の尼緑之助氏のキモ入りで十一月二十三日出

雲市駅前の旅館たいへいでおこなわれ盛会だった。

▼碑弓彦氏(大阪市同人)は十月下旬再入院された。一日も早いご全快を祈る。

▼不二田一三氏作ラジオ大阪の若井はんじ・けんじ出演「奥様コーナー」へ、本社句会で発表の「地下鉄」から、万の、花梢、天笑、富久一、つき子、頂留子諸氏の句が十二月四日午前九時三十五分から放送される。

▼米子正信和尚(今治市、柳号吹月)は十一月七日午後二時三十分遷化された。吹月氏は川柳雑誌時代からの熱心な方だった。

▼大陸川柳作家同窓会(第5回)の集いが十一月二日、毎日新聞東京本社会議室で開かれ盛会。大井正夫氏の熱情に敬服。

▼永田六竜子氏(大阪市)鳥取県浅津温泉から——女中の手借りてカニの足うまれる。

賛助会員 大阪市東住吉区桑津町五の一六八

本庄金三

何を選んでいたぐくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



大阪・東京・京都
なんば日本橋
四丁目
高島屋

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

腕組んだ男女ライトへ離れない
秋の冷え南部風鈴虚を誘う

和歌山市 秋月 宏 方

単身で発つ榮転のほろにがい

夕焼けこ焼け陽も有終の美を飾り

陳情がくしける応接間の威圧

老醜はどうにもならぬ整形科

そり返る癖仮縫いに押さえられ

小松市 山上 千 太 郎

入れ知恵の言い訳みじめに言い詰り

じぐざくの線もここにて切れた通夜

大洲市 米 沢 暁 明

酒うまし視野の限りの秋実る

ため息もこんなきれいな詩を育て

敬遠をされる齢としる早や寝

姿見へ不幸を詫びる赤い爪

名古屋市長谷川 鮮 山

今治市 月 原 宵 明

握る手の角度をつけてにぎり飯

安保には遠く深山で炭を焼く

半分は犬に与えてお頂戴

本社十一月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

ハワイの築山快夢起氏のご出席で「快夢起氏歓迎句会」の感が会場にあふれる。

葵徳三、定金冬二、墨作二郎氏ら好作家のお顔も見え、最近にない活気がみなぎり、文

化の月にふさわしい句会にしていたいた。

やや低調気味の本社句会の作品に、何かを求めねばなるまい。こんなときにこれらの好作家から「何かを」吸収することも方法ではないか。白柳氏の柳話の狙いも作品向上にあった。月間賞は藤岡花梢さん。これで二年連続がほぼ確定。(F)——整理・河井庸佑。

出席——与呂志・双葉・古方・文秋・天笑・

柳志・花梢・維久子・大吉・滋雀・一舟・冬

二・葛城・綾女・柳宏子・作二郎・貞山・生

長・新之助・千万子・庸佑・金三・季賛・白

柳・徳三・圭井堂・静馬・茂美・漢介・形水

・好郎・一三夫・いさむ・小石・鶴声・儀一
・千梢・史好・つき子・河産・栗・酔々・凡
吉・生々庵・一二三・肖二・富久一・鬼遊・
静歩・宣介・頂留子・修史・之保・小松園・
薫風 奈良子・多久志・快夢起・葉子

席題「ポケット」 定金冬二選

ポケットを嗅げば男の香いする 葛城
ポケットの小銭まとめて旅終る 貞山
ポケットに去年のままでの屑があり 肖二
ポケットに卵を入れて独り者 薫風
ポケットの金が尻押す縄のれん 生 長

プレタポルテのポケットに鳴る硬貨
 ポケットに手を入れ子供らしくない
 少年の夢ポケットの中に有り
 ポケットの白さやかに式進む
 ポケットの右と左にある浮気
 ポケットのものを並べて許される
 憤りポケットに明日の詩を温くめ
 ポケットの底に溜まった日々塵
 底のないポケットなのさ稼いで
 ポケットの底の我欲の颯の眼
 ポケットへ斜陽の過去の手を入れる
 切符よ財布よポケット妻が念を押し
 ポケットの小銭も一緒に走り出し
 かざさきへポケットはって手当した
 ポケットに両手を落ち目の背が丸い
 ポケットへ不労所得を突込まれ
 地球もポケットがあつたマルキシズム
 ポケットに二人の愛があたたかい
 ポケットにお守り札のない不安
 十円玉がポケットにあつた冬服
 ポケットの中味が染まりゆく愛だ
 人生の賭けポケットに辞表秘め
 ポケットに明日のプランが牙を研ぐ
 便利きママのエプロンのポケット
 ポケットへ突込められたら辞退せず
 仕立おろしのポケットに何か入る
 中年になりポケットにも夢がない
 ポケットに穴があいてる俺の恋

徳三 史好 庸佑 葛城 凡吉 藻介 小松園 鶴声 白柳 宣介 静歩 生々庵 つき子 千万子 滋雀 多久志 河産 一三夫 河産 一舟 白柳 作二郎 河産 柴 茂美 好郎 古方 史好 風

鍋焼きがあるポケットになり冬暖し
 ポケットにあるのにマッチおくれ
 ポケットの女を殺す火焰ビン
 反乱のポケット金属音がする
 ポケットにピラ貧政をなげきつつ
 ポケットにあるから鳩の温みに溺れ
 ポケットへ昨日を入れてる男
 冬のポケット影法師と対話する
 俺の淋しいポケットに来る十二月
 神前のポケットに我慾まだ残り
 ポケットの中の拳が喋りだす

徳三 静馬 藻介 作二郎 富久一 作二郎 藻介 静歩 蕪風 柳志 冬二

席題「高望み」 岡橋宣介選

嫁きおくれおだてに乗った事を悔い
 妹を先に嫁がせ高望み
 高望み諦らめた顔で僕の妻
 高望み未練などない定年期
 高望みやめてお嫁に行くといふ
 結納の高で婚約延期され
 結構に暮して俸せまだ望み
 うぬぼれの鏡離さぬ高望み
 高望み夢の階段ふみはずし
 大空を飛びたい亀の高望み
 高望み鏡四十の処女である
 黙っておれば高望みのよう言われ
 胎動にもう親ばかな高望み
 高望みヒステリックになるピアノ
 高望み一つずつ下げて縁をまち

肖二 好郎 生良 大古 醉々 冬二 千万子

高望み課長の椅子は金くさし
 器量には恵まれ過ぎて高望み
 降る程の縁談をこわす高望み
 高望みこころで折れる手も知らず
 美しいよって高望みかと思われる
 高望みしたからいまの妻がいる
 父の背をいとしく思う高望み
 高望みせぬが世間が派手にさせ
 高望みせえへんのに嫁きおくれ
 高望みそれまで命持つか知ら
 高望み友情だんだん薄くなり
 幼稚園もう大学へつけ届け
 コソ泥が三億円に口惜しがり
 高望み捨てれば少し太って来
 高望みした悔胸に独り住む
 諦めの文字砂にかく高望み
 市場かこの底にしなびた高望み

いさむ 文秋 圭井堂 文秋 与呂志 冬二 富久一 柳宏子 与呂志 静馬 いさむ 柳志 鬼遊 千梢 綾女 宣介

席題「写真」 英徳三選

黒梓へさがす写真はみな元氣
 鮎八の遺影に残る小さな顔
 スード写す父を憎む日憎まぬ日
 修正をされた写真の無表情
 鼻の差がはつきり出てる菊花賞
 色白いことを写真へ言い添える
 写真見せ合っている自惚れている
 スナッパ屋鹿寄せ用の餌をまき
 一枚だけ他人に写して貰うた旅

好郎 醉々 冬二 形水 圭井堂 形水 宣介 醉々 金三

赤ン坊がいちばん素直に撮れている
写真だけ残して遺骨が還らない
カラー写真緑りの風が吹いている
シャッターを押すとき鳩の目がねも
シャッターチャンスまだ北斎とはい
覆面にゲバボウわが子に似た写真
洋館にしたが陛下の額はかけ
独りみる写真をおんな持っている
写真帳ここの父はまだ若い
写真ではゆうべのヒスの顔でなし
引裂いた写真に女生きていた
歴代の社長写真で叱咤する
写真一枚陰の母を知るさすが
写真には撮れぬ山寺の鐘惜しむ
絵葉書の写真の雲は動かない

兼題「ハブニング」 橋高薫風選

ハブニング課長と言われても嬉し
日本の歌外人のハブニング
悪友におごつてもらうハブニング
ハブニング今日一日が楽しがり
ハブニング恋になるとは露しらず
コンペヤーに厭きて巷にハブニング
天才の暗示はいつもハブニング
ハブニングまた例外をこしらえる
ハブニングともならず女の眉がない
ハブニングロダンのひげが伸びても
ハブニング昭和維新は裏返えり

静馬 鬼遊 花梢 作二郎 古方 生々庵 一舟 冬二 庸佑 生々庵 藻介 多久志 奈良子 生々庵 徳三

ハブニングおんな指人形になる
ハブニング還暦の腰鳴らしつつ
ハブニングああゲバ棒が焼けている
産院で名札違えたハブニング
ハブニング裸ですじのない喜劇
ふうてんにマイクとらへハブニング
老いらくの恋ハブニングからめばえ
ハブニングなき日貧しき菊を剪る
ハブニング空の青さを見そこなう
ハブニング友の冤罪買つて出る
ハブニング司会者として動じない
母が見るテレビの中のハブニング
ハブニングあつて人生面白し
運命の死角におきたハブニング
ハブニング小さな命つみとられ
オイコラへつひ桶ついたハブニング
予想した通りおこったハブニング
こんなのも芸術と言うハブニング
しくまれたものかも知ハブニング
街録のハブニングきつい吃りなり
ハブニング唯それだけの事で済み
満一才ひとつひとつがハブニング
自分をば失っているハブニング
一度きりという人生にハブニング
ハブニング結婚までもしてしまい
二卵性双生児なるハブニング

兼題「替え歌」 傍島静馬選

替え歌に村田英雄が赤くなり
替え歌の方から先に憶えて来
替え歌の方で覚えた節まわし
替え歌になってみんながうたい出し
調子はずれの替え歌が笑わせる
替え歌が浮世の裏をのぞかせる
替え歌の方を器用に孫おぼえ
替え歌が出て宴会の山が見え
替え歌で政治の不満ぶちまける
替え歌もプリントしてく社の旅行
替え歌にワンマン社長にが笑い
替え歌で温泉名物コマージュル
替え歌で社歌を作つてみとめられ
替え歌が出て煩染めた花嫁さん
替え歌の一とこきわどい節まわし
替え歌に男性軍も顔負けす
替え歌へニヤニヤしてるほかはなし
替え歌も宴会用に作り替え
替え歌の出ない宴会もの足らず
即興の替え歌わつと座を湧かし
替え歌へ手拍子揃う応援団
替え歌に聞く懐かしの軍国調
替え歌もそこまでくれば聞き難い
替え歌もイーデスハンソン胴に入り
替え歌が売れて元歌忘れられ
替え歌をうたうあしたのないおんな
替え歌になって仲居も崩れだし
あどけない児の替え歌にハットする

圭井堂 天笑 小松園 圭井堂 季賛 静歩 一二三 柳志 庸佑 つき子 双楽 大吉 綾女 綾女 小松園 形水 藻介 多久志 河産 正朗 芳子 止水 扇水 以兆 一三夫 冬二 花梢 静馬

兼題「食通」

本多柳志選

食通もチクロの味とは知らなんだ
 食通がカバンに詰めた保健薬
 冷凍魚と知らず食通にぎりほめ
 食通の舌にも母の味は別
 食通と言わねばもとの呑みこみぬ
 うどんならきつねに限ると通の言う
 食通の舌ごまかしと添加物
 食通の手土産じんましんを出し
 食通の妻お茶漬けの日は続き
 ビタミンを聞かさず食通手で抑え
 食通の口にげても多過ぎる
 食通の腹におどろく腹の虫
 食通に振り回された味音痴
 食通が居て地下街にゆくにぎり
 食通へ甘えて見たい日曜日
 食通の残り捨てるに捨てられず
 漬もんまで小言を言うて痩せている
 食通の精進料理へ気がつかれ
 饒舌の食通おでんが冷えている
 食通に飽きはらわたまで食われ
 ゲテモノを食べ食通にされている
 食通の客も来ますとやりかえし
 食通に鯛の目玉が狙われる
 食通の帰国お茶漬恋しがり
 げてものをあさり食通と思ひ込み
 食通で通りちつともよう肥えず

以兆 扇水 章雅 響二 どんたく 千里 止水 正朗 芳子 旅風 磯山 祥月 野迷路 日満 鶴丸 花梢 静馬 静歩 河産 鬼遊 柳宏子 生良 鬼遊 千梢 一舟 花梢

食通へたで酔のはしりもう届き
 通ぶつて水増し酒を賞めて去に
 食通もやっぱり最後は重湯なり
 アメリカでは独逸では食通まだ喋り
 食通家つまみ食いして味を褒め
 さきすぎたわさび食通としての意地
 食通に値段を聞いて叱られる
 食通も家では文句よう言わねば
 通ぶつた客に板前逆わず
 食通も食えぬなれ酢持て余し
 父と行く旅は蕎麦やを食へ歩き
 食通ときびすを返す戎橋
 漬物の味にうるさい舌を持ち
 ぜいたくな食べ方をして通にされ
 食通の講釈お女将もてあまし
 商用が出雲のそばを見落さず
 食通も昼はうどんですましとき
 通と来てきようざは不味いとも言
 金かけた口が書かせるたべある記
 食い歩る記値段のことには触れて
 食通を途中下車さすそばの味
 食通が賞めて呉れたは器だけ
 食通が自慢のふくで娑婆を立ち
 食通にこの日の海はすこし荒れ
 講釈の長さへフグが煮えつまり

栗 柳宏子 圭井堂 好郎 好郎 生々庵 藻介 静馬 好郎 大吉 茂美 金三 凡吉 柳宏子 醉々 鬼遊 静馬 葛城 文秋 滋雀 一三夫 滋雀 維久子 冬二 柳志

兼題「裏づけ」

川村好郎選

裏づけるアリバイのない午前様 鶴丸

星のない飯途裏づけを考える
 裏づけが見つかり石器の謎がとけ
 奥さんの裏づけだから貸してやり
 裏づけを野党握ってくいきがり
 裏づけが取れて帰りの軽い足
 切札にする裏づけが笑うている
 裏づけるように化粧が派手になり
 社長のおつと言ひ裏づけの高い椅子
 興信所まで裏づけに動いてた
 歴史の裏づけに土まみれの発掘
 裏づけ捜査もう二足目の靴もちび
 裏づけがあつて強気に押まくり
 裏づけがあるから正面切つて言え
 裏づけをその条件に引き抜かれ
 天職と知る裏づけのない生活
 裏づけへ人間性を買つてくれ
 保証人を取り裏づけを取り
 社のバックあつて持ててるとは知
 裏づけがあつて女房のトゲトゲし
 裏づけへ執念捨てていぬ刑事
 裏づけをされて雇れマダムなり
 裏づけがあつて泰然自若たり
 銀行の裏づけもあり社の強み
 裏づけは整い過ぎて疑われ
 裏づけのペーゼに霜の夜を帰る
 裏づけもない定年をじつと待ち
 裏づけのない椅子にビエロがすわ
 裏づけを叱った課長がつけてくれ

八郎 野迷路 以兆 正朗 小松園 古方 新之助 一二三 文秋 白柳 小石 柳宏子 いさむ 奈良子 奈良子 一三夫 葛城 静馬 与呂志 藻介 花梢 小松園 双葉 葛城 徳三 醉々 冬二 好郎



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

迷信と思ふど祖母のままにさせ
ウイトで捌きマダムは灯に泳ぎ
ウイトは妻にまかせている落目
迷信もたまに当って捨て切れず
外ずされた軌道と知らずまっしぐら
ゆっくりして行けと時計をま見上げ
お化粧が剥けてミセスの顔になり
軌道はずす元気がほしいとも思ひ
誠実そのまがウイトになって
ゆっくりと起きて遠雷聞くはだか
迷信と思ひながらも日を選び
迷信で祖母は病んだり治ったり
単線の軌道で蛇に驚かされ
ゆっくりと時計の針の動く日よ
円満な軌道の裏にあった嘘
迷信がすすむ縁談とまどわせ
軌道に乗ってから商魂ゆるみ出し
お茶たてて処生の道を訓させる
平行の軌道私の恋終る
ウイトで急になごんだ満員車

馬 雀 滋 柳 小 柳 新 庸 古 文 綾 白 柳 水 凡 静 喜 あい 金 千 誓 二

急患へ医師ゆっくりとたちあがり
定退の思案ゆっくり腕を組む
生と死の境迷信でもすがり
人出不足食事ゆっくりさせぬ日々
不具の手に汗し横断歩道長い
末っ子も父のレーンを走らない
軌道に乗るまでの内助の細い腕
親だけが軌道はずれに気付いてた
ゆっくりもしてられませと坐り込み
もう少しゆっくり話そう愛にふれ
大正の目で無軌道に見えてくる
追突の原因ゆっくり走り過ぎ
玉造川柳会（大阪府） 西出一栄報
譲り合い矢張り打算の末の末
譲り合う隙にさつと坐られる
あなたからまああなたから雨に濡れ
譲り合い結局上座あけたまま
交通マヒ気まぐれで出てまき込まれ
気まぐれの受験がきめた進む道
また喫うてはるまたお人
気まぐれな雨に干物なやませ
気まぐれな女は命がけになり
気まぐれな談話に株の値が変り
奥の院鐘が風情を添えてくれ
わびびに遠い茶席の膝小僧
いつとなく情緒がかもす仲直り
旅の情緒を鞆に詰めて鈍行車
ふん囲気は満足情緒のないベッド
恋文の末尾に想いこめた紅
かもし出す情緒へ忙し舞台裏

鶴 儀 一 舟 子 君 葵 瑞 野 肖 千 虎 章 凡 柳 白 形 天 柳 頂 古 好 鬼 一 金 静 誓 川 富 六 龍 子

別れると云えば相談せぬと云う
相談に乗れる我が身の幸を知り
相談欄別なはれと突っばなし
かんじんの時に相談してくれず
兄嫁として相談の端に座し
相談をしいた実家の灯温し
まるべに・あすなる・どんぐり合同会
生れつき女性上位がつきまとい
敬遠をされて残業冷房さえ止まる
敬遠はしが寄附だけちゃん取り
グループでしか会えない彼を
あれ以来女は照れずよく詛り
ブラシかけ送る人あり愛ある日
初背広着る度脱ぐ度ブラシ掛け
毛先磨るブラシと共に妻は老け
行商の単車は雲に追われてる
泣き寝入りするが老妓の話です
泣き寝入りするが無難とみた相手
泣き寝入り六法全書に起こされる
グループにハズの飼育を教えられ
また富士が雲だけ見せて旅終る
飛行機仰いで平和かみしめる
風雲急妻晩酌にまで当たる
一点の雲なし今日は留守居番
スケッチのこころにひとつ欲しい雲
泣き寝入りなどしておれぬ村八分
二次会へ先生を呼ぶ声がない
会長にまっすり上げられほっとかれ
敬遠をしいた人にはよく出合い
歯ブラシのなじめもよし旅の朝

女 綾 肖 二 青 竹 雀 文 秋 子 君 立 虎 泉 幸 八 節 弓 吐 彦 来 代 郎 子 睡 兒 虎 生 好 一 儀 風 茂 吉 大 青 素 扇 鬼 瓢 史 好

齒ブラシの一本すでに靴へゆき
感傷はグルーブ抜けて一人旅
齒ブラシでハンコ掃除に代用し
舌も出さぬケチンボアミダも敬遠し
不快指数高く白雲静止したまふま
川柳たましま 水粉千翁報

峯ひとつ越えれば故郷のみかん山
崩れまい敗者の影であらうとも
組板のくぼみに亡母の影が生き
さすらいの果の果なる峯に佇ち
嘘のない暮しへ今日の旭がのびる
ハミスのきまほくろの位置を交え
恢復を助手一番にうれしがり
振り向いて見れば私の影だった
雲と峯その一線で絵が生きる
峯仰ぐ今日いさかいしことを悔い
峯つづき仏法僧を聞いている
旭いま水平線を染め分ける
当分は気ままにやれと左遷され
盆栽の気ままに許してみたい
花植えた人は帰らずすでに秋
宇宙元年月を土足にして帰り
オースケール川柳会 大坂形水報

雨台風壁の白さも変えて行く
風船の字をこわそうにふくらませ
風船を空に取らぬまに千秋楽
金星の一つ出ぬまに千秋楽
腹立って壁に怒りをぶちまけた
白い壁文字がいっそう浮きあがり
大関になつても唄のアルバイト
青春の恋はひとり相撲をとつてた

落書きが未だ残つてた故郷の壁
刑務所の壁をサイケにしてみたら
習うより慣れの一手で壁を越し
独り者耳ばかりが冴えわたり
壁に耳新婚さんは手で話し
子の風船きれいな空へ放たれる
酔うてみても壁の厚さは変らない
風船の命を破つた母の顔
寮の壁スードの外は何もなし
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
ゼット機を一度は飛んだ敬老日
ゼット機を見送る人はもう見え
ゼット機と婚期に迷うスチュワデス
ゼット機になれてタレントと稼ぎ
ハネムーンゼットで行つても別れ
川柳塔まつえ復活一周年・山川児を偲ぶ
酒豪だった父の命日酒を買い
しじみ取る舟近く見る湖の宿
山暮れて里の寒さを身に感じ
裏山に花咲き花散り詩が活きる
山のいのち四季それぞれの色をみせ
スポーツを愛で勝負にこだわらず
銀婚の日暮れ彩どる湖の宿
湖の宿居心地が好く夜を明し
清濁の濁で河口の巾と巡り
嫁ヶ島デイトのボートひととなり
川の流れ潮来花嫁舟で行く
蒸発は単線に乗ったまで判り
流し雛川の流れは陽に光り
単線は伸びて炭焼く山に入る
嫁ヶ島水の松江のシルエット

勝負師と言われ川上巨人の鬼
単線でゆずり合つての特急車
淡水化川の流れの泣きどころ
一条の瀬に逆って鮎光る
山の氣に触れて世俗を忘れて来
虚子も又路郎も一句湖の宿
川の流れへ女女のみだしなみ
湖の宿でうっとり聞か神話
谷川の石流れて来た丸
雲うまれ雲死すところ湖の宿
山あいを染めてストンと陽が落ちる
満月が山を二つに割つて出る
ままたらぬもの酒豪だけ親に似る
同点の勝負決めるにジャンケンポ
復活へ地味な努力が続けられ
単線の駅のんびりと水を打ち
変わり行く湖岸にあきた嫁ヶ島
夏やせも二日酔いも知らぬ酒豪
雨の色紫にして湖の宿けむる
嫁ヶ島カメラのバックにされただけ
程々の距離で見えるもの嫁ヶ島
復活を期し雑音に耳ふさぐ
たかがパチンコと言つても勝運
煮て焼いてつくつてやはり鯛の味
ウイロー社句会(ハワイ)
月あわれ踏みじられて審かれる
月末においでと行けば貸家札
三勇士月の素顔を見て戻り
神秘さがあつたで月も拝んでた
颯爽と月に祈願の旗が立ち
珍客を尻目に月は冴え渡り

柳主 加主 多童 愚童 桃童 軒太 紫明 新雪 一保 弘朗 白朗 芳子 正朗 明朗 独仙 柳助 緑之助 鶴丸 孤呂二 叮紅 通児 晃男 天痴人 祥月 峯円 カロ女 紅茶 曉月 山泉 水

星条旗月とは切れぬ仲となり
新婚が月賦の味をはや覚え
星条旗今も月から地球を見
奪われた処女をなげくかおぼろ月
も落ち別れて帰る盆おどろ
帰る音聞くまで母は寝つかれず
手に汗を握るアポロの帰還まで
和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報

荷造りの男結びを知らぬ助手
縄埃り人手少ない愚痴つづく
縄張りの外で野次馬推理する
コンピュータ矢張りみくも信じ
コンピュータ果報寝て待てと言
浮気を出来ぬ世とコンピュータ
犬の縄届かぬ所に靴を干し
妥協せぬ姿勢結論だけを言う
構えてる姿勢へ話題取り替える
端麗な姿勢暑さをよせつけず
荒縄で好意の西瓜持たさる
縄をぬう老骨頭と物言わず
松茸が縄の境界の外で生え
「停電だ」コンピュータの泣き処
あの人の心を示せコンピュータ
強がりの姿勢肩が淋しいネ
一心に拝む姿勢に子も合す
低姿勢来たたら集金して戻り
死せばこのかたちか胸に花を抱く
大鳥居姿勢正しく通りぬけ
目に見えぬ縄張りがあり組けんか
縄に祈禱の声の揃い澄む
捨て犬の首に荒縄あわれなり

義枝 快夢起 紅溪 万里歩 蒼蛇樓 浮草 エス子
白柳 不二也 葵水 三幸 公作 勇次 智水庵 富子 みさを 佐知子 次章 光治 公作 一光 哲夫 淳子 泰子 城石 智恵女 蘇風 勇次 春子 宣子

電子計算機 頭のにせて みたくなり 凡夫
こまつ柳壇(小松市) 山上千太郎報

温泉で疲れ酒で疲れて宿を出る 魚山
今日も無事疲れを落す湯があふれ 友孝
お化粧の下につかれた肌のシミ 富美子
ニンニクも 玉子も 効き目ない疲れ 弘実
疲れたと意地にも言えぬ午前様 吉枝
延長戦テレビの前で見るつかれ 信子
養生も疲れますよと日の長さ 清香
意気地なし 背中へ視線うけて立ち 美和子
反抗の理由がわからぬ子の背中 たつ路
背中一ぱい 十七才の黙否権 しみ子
背番号大きく廻るホームラン 柳子
背の入墨が湯つくば一人占めにする 芳朗
背中から背中へ渡す一人っ子 松水
外相の 背中に重い北・南 城南
生きて来た長さを 後ろつきに見る 千太郎

駒つなぎ

岸南柳報

ひげ面とゲバ棒どかが狂ってる 潔
このひげが私のアラをかくしおり 竜雲
相部屋に刺つてやりたい髭の顔 小路
ひげ落し少しはあかの抜けた顔 市子
お袋と呼んで髭生えニキビ出来 弥栄子
良心がヒゲある妻を遠く視る みよ
先生にまさった髭の高校生 育園
あご髭があるので委員長にする 白柳
気短かの髭はチヨイ／＼形変え 柳信
理容師が床屋みたいな髭伸ばし 南柳
ゲバ棒へヒゲの威厳が役立たず 悟郎
ひげ面に似合わずやさしパパの顔 ひとし
汐時と知って美髭を剃り落す 小松園

あの時の 思い出秘めた ヒゲをなぜ 規一朗
河内川柳会 香川静々報

沢庵の 歯音も 高い 快復期 一治
日曜とは 知らず 目覚し 鳴りつけ 河産
ひとりだけ 乗せたら 初発動き出し 天笑
手ぎわよく 続む札の 音他人の 金儀
母さんの 時計初発の 音で起き つき子
王手飛車だけ は駒音高く 立て 酔々
下駄はいた デートは 気心知りつくし 虎声
がらがらと 音を立てても 凶が出る 大吉
下駄履けは 口笛ついて 出る 休暇 吐来
不意打ちの 客へ用意の ガードマン 鬼遊
騒音を 浴びて 男の 道たしか 好郎
城北明朗句会 川口弘生報

祝福の中に 怨みの 目を感じ 弘生
目が合つて 一目うれしい 片思い 為二
目に入れても 痛くない 孫夏休み 与呂志
捨てられる 子の 目が 母を 信じきり 雅万
才媛の 誉れ 高く 眼が 近い 秀村
目を つぶる ことが 汚職の 淵に 落ち 多幸
アロハシャツ 銀行員 意気の 目が 光る 生仏
万博工事 他国 同志も 意気が 合い 三十四
忍ぶれば 物価 ますます 高く なり 茶坊
ヤケ酒の 相手 も つとめ 古女房 セツ
嫁の アラ 大きく 見える 眼鏡 なり 隼人
ふじかけ短詩睡会 藤本礎山報
嫁に ゆく 姉の ふとんが 縫いあがり 国子
千ふとん 満盤 飾の ように 懸け 二朗
うちの 着物 ふとん になって 戻って 来 勝子
絹ふとん 見栄の 一つに 干す 団地 敏彦
言いまけを ふとん の中で 口惜しがり キクコ

病む父のふとおさえて 飯にする 和宏
すねて寝たふとんを母がおさえてた 恵子
ふとん蹴り今朝も起るよ幸せに 葉舟
馬肥ゆる候をふとんの中の粥 勝久
新婚のふとんの柄が忘れられず 和久
はねのけたふとんをそとと娘が着る 可也
絹ふとん好きな女で寄りつけず 泰嗣
珍客にされたふとんで 温う寝る 征也
病床の母へ着せたい羽根ふとん 忠志

忠臣蔵始末

吉田水車

今更忠臣蔵でもあるまいと思えたが、本誌の先号で一すふれさせてもらったので、ついでながら結末記として、も一度お許しねがいたい。私見として忠臣蔵には三つのやまがあるようで、第一は言うまでもなく殿中の刃傷第二は赤穂義士の念頭を去らずの決行、終りの三は頭領大石の念頭を去らず、しかもその希いも絶望となり遂にあだ討ち決行に踏み切らせた所の内匠頭舎弟大学長広による浅野家再興問題と吉良家の行方である。この第三の事柄を解明されたものに菊村紀彦氏著「赤穂義士討入り以後」がある。それによると大要次ぎの通りである。

事変後閉門中の大学長広が赦免されたのが宝永六年八月二十日で翌七年九月十六日房州原郡で五百石の旗本寄合として復帰し、維新まで続いた。斯くして浅野家再興の形をとつ

柄ふとん 踏みつけられる事に馴れ 鎮也
コオロギが啼くからふとん縫い急ぐ 佳女
座ふとんも縫えて嫁く日がもう近い 礎山
電電岡山川柳同好会 光好陽子報
みこももう過疎へ 忘れられたまま 照子
和服でもチラリと見えるふくらはぎ 正香
すれちがう和服にからむ女の眼 允水
参観日子供をよそに和服ショー 山香
記念品自分好み品の品を買い 有淡

たのが、あだ討ち後九年目のことである。

一方ケンカ相手の吉良家はどうかだったかと
言うと、吉良義士の義嗣子吉周（上杉弾正綱憲の子）は赤穂浪士切腹の日に大目付に呼び出されて、「浪士討ち入りの際のふるまい不届き」とあって元禄十五年二月四日諏訪安芸守あずけを申しわたされ速刻信州諏訪へ赴いた。吉周は病弱の上に不如意な生活が続き、宝永三年一月九日発病翌二十日二十一才で歿した。これで事実上吉良家は断絶した。これはあだ討ち後三年のことであった。

ここでおそらく考えるのは、「弟大学長広とは義絶の仲であるから、浅野の跡目相続の願い出があっても取りあげてもらいたくない」と言う意味の内匠頭からの書面が残っていると言うことである。

私見ながら以上始末記としたが、忠臣蔵一件には謎と疑問が多々あって碩学、専攻の士をいよいよ、悩ましつつけることであろう。

古川柳 柳 拔 萃

今時は無いと出て来るせんがく寺

神前に袖のあわなないモーニング 周作
スケジュール秘書の手帳がきめてゐる 喜久次
人生の岐路に たつ娘の晴れ姿 恵子
どうしても課長のメモが気にかかり 三文
村祭りもこしも出せぬ過疎地帯 勝哉
コンタクトレンズ 結婚してわかり 陽院
結婚の幸せ云わず愚痴ばかり 能子
ミニの娘も婚礼だけは和服にし 利坊
手帳から二人の中に溝ができ 陽子

すす竹をうりに来るのはたけ林

見物にむだ口のなない泉岳寺

泉岳寺他宗もみんな引うける

拙僧までも本望と首をみる

内蔵之介くしゃみをしては医者にみせ

一字づつ仮名のはたらく十四日

忠臣は初手桶の木でのちは石

納豆を春まではす泉岳寺

吉良びやかなるお寝巻が炭だらけ

★川柳塔社常任理事會

十一月四日理事会。いよいよ新年号から誌代の値上げをすることになった。これは同人総会で承認を得たものである。

生々庵主幹が公私ともに多忙をきわめておられるので、同人吟の「自選」案が半年ほど前から懸案中であった。それが希望者に限り「自選」ということになった。ただし自選は四句以内なので巻頭はとれないことである。出席―静馬、白柳、多久志、文秋、古方、栞、小松園、一三夫諸氏。

誌代改正

物価高による攻勢へ健全財政はむずかしく、これは同人雑誌の宿命かも知れません。

一般購読の方々には、でき得るかぎりご迷惑をかけないよう、同人による賛助会員制まで設置しましたが、やむを得ず誌代改正にふみきました。ご諒察のほどお願いいたします。

新年号から百八十円に改正いたします。ただし、すでにお払いこみの分は改正前の誌代で結構でございます。

★同人にかぎり「自選」を希望者だけ募ることになりました。自選は四句以内で、自選と朱書してご投句ください。

川柳塔社

本社十二月句会

日時 十二月六日(土) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題	柳	ス	パ	イ	話
席題	「銀」	「行」	「術」	「逃」	「場」
三題(題と選者は当日発表)	若本 多 久 志	神谷 凡 九 郎	菊田 い さ む	戸田 古 方	菊沢 小 松 園
各題三句	選	選	選	選	選

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社
1月の兼題 「べ 再」「ル 会」「花 餅」

二月号発表(12月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

募
「独身」 村上 春 巳 選
「梅」 中島 小 石 選
「タレント」 長野 文 庫 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

三月号発表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「パン」 山川 阿 茶 選
「叱る」 桜川 不 水 選
「土曜日」 小西 無 鬼 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価 百四十円(送料六円)

半年分 八百七十円(送料共)
一年分 千六百八十円(送料共)

昭和四十四年十一月二十五日印刷
昭和四十四年十二月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 中島 蓬 太 郎
発行人 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★ことしから十二月号に、その年の秀句を特集することにした。二賞候補にえらばれた作品ばかりである。同人吟だけ中間発表の分まで収録したが、「近作柳樹」は、スペースの関係で割愛した。

★「これが川柳塔だ」というわけであるが、作家も選考委員も、とにかく一生懸命やったのだから、これがすべてなのである。川柳塔の力を全部出したのが



本年の「秀句抄」なのだ。

そこで、これで胸を張れるか、謙虚に反省するか。それは皆さんの自由である。

★ここでハッキリ申しあげよう。「川柳塔」になってから、本は早く出るようになったが、同人吟は「川柳雑誌」時代より低下しているのではない。柳界の王座をねらうなら、作品でその黄金のイスを勝ちとれ」というのが世間様の川柳塔評である。

★うれしいことを一つ。

「川柳塔サンでうらやましいのは、一本に美しくまとまっていることである。外部から見ていても、和の力のたくましさがかかる」これも、よさんの川柳塔評である。

★この夏ごろから、同人作品の「自選」問題が出ていた。生々庵主幹は大阪府の医師会長という重職のうえに、ラジオと新聞の選をもっている。そこで希望者だけ、「自選」にしては？という事だった。

★この自選問題でつきあったのが、自選にする以上

どんな句を送ってきても発表する義務があることだ。かりに故日車氏に「元旦一暮る」という句があったが、こういう作品まで発表しなければならぬのか、ということだった。

★故路郎先生から、十七字にしがつかず十七音でもよいと、直接うかがったことがある。現在の、川柳塔作品のスタイルがそれである。だから「自選」になっても、この十七音は守って

いただけると思うのだがどうだろうか。

★句会の選者吟で、「末摘花」的のものを出した人があった。これはスグよそでたたかれた。「自選」のむずかしさがここにある。

★同人吟の五句組の顔ぶれが毎月ほとんど同じだという声が大きくなった。こういう声は予期していたことだが、これは主幹が責任をもって選をされている仕方がないであろう。「顔」で選をするのではなく、「作品」で選をされているはずである。

★仲間がいきの選というこ

たのしさ ひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店・神戸支店
東京大井店・数寄屋橋店

とは、人間である以上、多少はあるかも知れない。だが、そういう「うたがわしき」人には、句会でもあまり選をお願いしていないので安心していただきたい。

編集部や句会部は、筆跡を知るグループ同士には、昔の「しゅうとめ」のようなイジワルイ目を光らせているのである。が、しかし、よい作品なら、同じグループの人が三句とも入選してもおかしくない。自分のこととおそれ入るが、十何年前、四題のうち、三題まで「天」をとり、そのうちの二題は天地人を一人占め

にしたことがあった。——こういうこともあり得るのである。

★三年前、社の小谷葉子さんとぼくが、二賞の準優秀作に選ばれ、実は遠慮したのだが、主幹から「作品」でとったのだから遠慮することはない——と云われ受賞した。いつかもここで書いたが、自句を多くとってくれる人は「名選者」ということである。

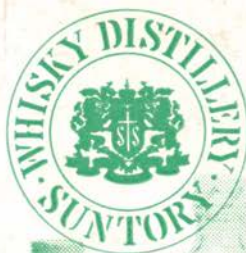
★読んでよるこばれない後記を書いたうえに次号から誌代の値上げである。よろしく願います。

(不二田一三夫)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年十一月二十五日 印刷
昭和四十四年十二月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 十二月号

世界の通が憧れる……



国際銘柄

サントリー

■インベリアル・ロイヤル・オールド・角瓶
カスタム・ゴールド・ホワイト・レッド



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

また
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 641) 3 5 6 4

風光明輝な
海岸美を
誇る

定価 百四十円 (送料六円)